

KY 1号窯跡

『五所川原須恵器窯跡』における初現期窯跡の発掘調査報告書

2005年2月

五所川原市教育委員会

序 文

「五所川原須恵器窯跡」は日本最北端に位置し、他地域で須恵器生産が終焉を迎える時期に青森県全域及び、北は北海道、南は秋田、岩手両県北部まで須恵器を供給していた窯跡であります。

五所川原市教育委員会ではこの貴重な文化遺産の保存活用を図る目的で、平成 10 年度から本格的に学術調査を実施し、平成 16 年 9 月 30 日に国史跡の指定を受けたところであります。

このたび平成 15、16 年の両年に渡って、当窯跡の中でも初期にあたる KY1 号窯跡の発掘調査を実施し、報告書刊行の運びとなりました。

その結果、五所川原須恵器窯跡の初期では、主要な生産は食膳具であり、全体の過半数を占め、その他にも貯蔵具、ミニチュア等が生産されました。

また、土師器を須恵器の窯で焼成していたことが確認され、須恵器工人の中に土師器製作を行っていた集団が含まれることが解りました。

最後になりますが、今回の報告書の刊行に先立ちご協力・ご助言を賜りました関係機関並びに関係各位には厚くお礼申し上げます。

平成 17 年 2 月

五所川原市教育委員会

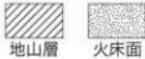
教育長 原田 信夫

例 言

1. この報告書は国庫補助を受け、平成 15・16 年度に実施した発掘調査及び試掘調査事業の報告書である。
2. 遺跡名（窯跡名） 広野遺跡（KY 1号窯跡）
3. 所在地 青森県五所川原市大字高野字広野 93-1、96-1 ほか
4. 調査目的 最北の須恵器生産地である五所川原須恵器窯跡のうち KY 1号窯跡の発掘調査を実施することにより、初現期の窯跡の性格を解明するため。
5. 調査主体 五所川原市教育委員会
6. 指導機関 文化庁 青森県教育庁文化財保護課
7. 試料の鑑定分析については次の機関に依頼した。
炭化材の年代測定及び樹種同定（株）パリノ・サーヴェイ
8. 本報告書の依頼原稿は目次と文頭に示した。図版の作成、執筆及び編集は藤原が行った。
9. 本報告書に掲載されている地図は国土地理院発行 2万5千分の1 地形図「浪岡」、「大沢迦」及び 5万分の1 地形図「青森西部」を複製したものである。
10. 発掘調査にあたり、発掘調査区並びに周辺の土地所有者には、並々ならぬご配慮を頂いた。ここにご芳名を記して感謝する次第である（敬称略、順不動）。
小笠原 秀一、福士茂、福士了、福士キンシ、 福士和一
11. 発掘調査及び整理作業には以下の人々が従事した。
伊藤良子、工藤慶子、齊藤國良、成田正行、平田崇
12. 発掘調査及び整理作業にあたっては下記の方々からご助言、ご協力を賜った。ここに芳名を記して感謝する次第である（敬称略、順不同）。
村田晃一、宇部則保、小保内裕之、木村高、茅野嘉雄、永嶋豊、藤井誠二、藤沼邦彦、関根達人、右代啓視、中澤寛将、横山英介、木村淳一、福田友之、浅田智晴
12. 出土遺物・実測図・写真等は五所川原市教育委員会管理の下、五所川原市歴史民俗資料館に保管している。

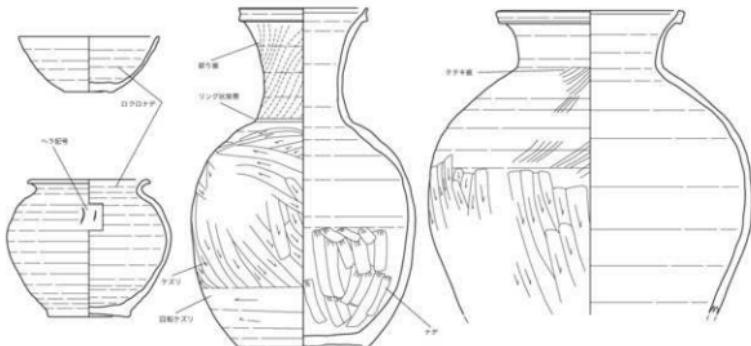
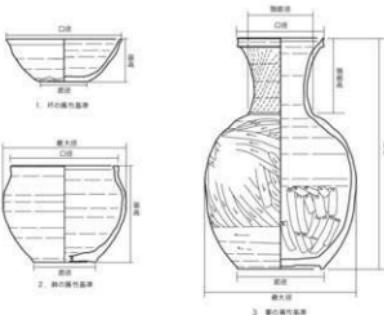
凡 例

1. 文中の窯跡名は平成 13 年度の検討委員会によって決定した、大字名による新しい窯名に基づき表記している。
2. 遺構の略記は以下の通りである。
SK (土壇)、SD (溝跡)
3. 遺構の実測図のスケールは 50 分の 1 にした。
4. 出土遺物のスケールは 3 分の 1 を基本としているが、大甕の中には紙面の都合上 6 分の 1 としたものがある。
5. 土層の色調については『標準土色帖』を使用した。また層の堆積番号については基本土層はアラビア数字 (I・II・III・...) を、遺構内の埋土は算用数字 (1・2・3...) あるいはアルファベット (a・b・c...) を使用した。
6. 遺物の写真は原則としておよそ 3 分の 1 としたが、実測図同様紙面の都合上 6 分の 1 としたものがある。
7. 遺構中のスクリントーンは以下のものを使用した。



8. 各遺物の属性抽出における計測点は右図のとおりである。なお、各器種の組成を求める方法として、口縁部及び底部の破片数法と、口縁部及び底部の残存率が 12 分の 1 以上の個体を抽出し、その各破片に残存率を掛けたものの総和により個体数を算定する方法を探っている。ここで属性を抽出したものは、正確を期するために個体数を算定するのに使用した残存率 12 分の 1 の破片のみである。

9. 遺物の表記方法は以下の通りである。



目 次

第1章 調査に至る経緯と調査要項·····p.1	写真5 回転ヘラケズリ調整された個体···p.11
第2章 調査方法と調査の経緯·····p.1-3	図17 壺I類の口径・頸部径分布図···p.12
第3章 遺跡周辺の環境·····p.3-5	図18 壺I類の口径・頸部高分布図···p.12
第4章 検出遺構·····p.6-8	図19 壺I類の口径度数分布図···p.12
第5章 出土遺物·····p.9-25	図20 壺II類・甕I類の各種端面形···p.12
	図21 壺II類の口径度数分布図···p.13
	図22 壺底部調整別組成図···p.13
	図23 甕I類の口径度数分布図···p.13
	図24 甕II類の各種端面形···p.14
	図25 甕II類の端面形組成図···p.14
第6章 KY1号窯跡灰原出土炭化材 の年代測定と樹種同定	図26 土師器様須恵器の各種端面形···p.14
バリノ・サーヴェイ株式会社···p.26-28	図27 土師器様須恵器の器種組成···p.14
第7章 まとめ·····p.29-30	図28 各種ヘラ記号···p.15
	図29 窯別の器種組成···p.16
挿図・図版目次	第1図版 KY1号窯跡出土須恵器(1)···p.17
	第2図版 KY1号窯跡出土須恵器(2)···p.18
	第3図版 KY1号窯跡出土須恵器(3)···p.19
	第4図版 KY1号窯跡出土須恵器(4)···p.20
写真1 1次調査作業風景·····p.2	第5図版 KY1号窯跡出土須恵器(5)···p.21
写真2 2次調査作業風景·····p.2	第6図版 KY1号窯跡出土須恵器(6)···p.22
図1 KY1号窯跡周辺の地形分類図···p.4	第7図版 KY1号窯跡出土須恵器(7)···p.23
図2 五所川原須恵器窯跡位置図···p.5	表1-1 KY1号窯跡出土須恵器観察表(1)···p.24
図3 KY1号窯跡調査区全図·····p.6	表1-2 KY1号窯跡出土須恵器観察表(2)···p.25
図4 KY1号窯跡·····p.7	表2 放射性炭素年代測定および 樹種同定結果···p.26
図5 SK01・SK02・SK03·····p.8	表3 暦年較正結果···p.26
図6 SD01・SD02·····p.8	図版1 ブナ属の組織写真···p.27
図7 坯の器形分類図·····p.9	図30 KY1号窯跡a6グリッドA窯 灰原1層の暦年較正曲線···p.27
図8 坯の各種端面形·····p.9	のみられる個体···p.27
写真3 手持ちヘラケズリ真 のみられる個体·····p.9	写真図版1 1次調査···p.33
写真4 底部に補修痕のみられる個体···p.9	写真図版2 2次調査···p.34
図9 坯の器高・口径分布図·····p.10	写真図版3 KY1号窯跡出土須恵器(1)···p.35
図10 坯の底径・口径分布図·····p.10	写真図版4 KY1号窯跡出土須恵器(2)···p.36
図11 坯の口径度数分布図·····p.10	写真図版5 KY1号窯跡出土須恵器(3)···p.37
図12 坯の底径度数分布図·····p.10	写真図版6 KY1号窯跡出土須恵器(4)···p.38
図13 鉢の器形分類図·····p.10	写真図版7 KY1号窯跡出土須恵器(5)···p.39
図14 鉢の各種端面形·····p.11	写真図版8 KY1号窯跡出土須恵器(6)···p.40
図15 鉢の口径度数分布図·····p.11	
図16 壺I類の各種端面形·····p.11	

KY 1号窯跡

『五所川原須恵器窯跡』における初現期窯跡の発掘調査報告書

第1章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯

平成15年（2003）五所川原市高野字広野地内の宅地建設に伴う試掘調査を実施していたところ、近隣の農家の方から自分の畑で須恵器や窯壁片が出土するとの報を受け、急速現地へ赴き、踏査したところ地表面に須恵器片や窯壁片が散乱しており、窯跡で間違いないと確信した。そこで収穫樹を外して試掘トレンチを設定し、調査を実施した。

第2節 調査要項

1. 調査目的

五所川原須恵器窯跡の中で最南端に位置する窯跡であり、窯跡群の操業開始時期の様相を解明するため。

2. 調査期間

(1次調査) 2003年5月6日～5月21日

(2次調査) 2004年5月10日～6月9日

3. 遺跡名及び所在地

広野遺跡（KY1号窯跡）（遺跡番号 05101）五所川原市大字高野字広野93-1、96-1ほか

4. 調査面積 約60m²

5. 調査担当機関 五所川原市教育委員会

6. 調査体制

調査員 原田 信夫（五所川原市教育委員会教育長）

調査担当者 五所川原市教育委員会

教育部長 葛西 鮎

生涯学習課

課長 川村 喜代一（平成16年3月31日退職）

中村 健（平成16年4月1日～）

課長補佐 柴谷 和夫（平成16年3月31日まで）

盛 重人（平成16年4月1日～）

係長 佐藤 文孝

主任 藤原 弘明

第2章 調査方法と調査の経緯

第1節 調査方法

微地形調査を実施し、平面直角座標第X系に基づき基準点TF5-1（X = 82,446.198、Y = -25,257.910、Z = 37.105）、TF5-2（X = 82428.326、Y = -225,248.732、Z = 37.210）を設置した。調査区は1次調査では、リンゴの樹を避けるようにトレンチを設定し、トレンチに平行する形で1mグリッドを設定した。2次調査では窯体の方位に平行となるように設定し、調査区内において1mグリッド（南北方向に1・2・3・・・、東西方向にa・b・c・・・）を設定した。

攪乱を受けていると考えられる上層の遺物は各グリッドごとに一括で取り上げを行った。また原位置を保っていると考えられる灰原層出土の遺物は可能な限りトータルステーションを使用して、座標

点で取り上げた。

層序は上層より番号を振り、自然堆積層はローマ数字（I・II・III・・・）を使用し、遺構内埋土はアラビア数字（1・2・3・・・）を使用した。なお同一由来の層でも細分が可能な場合は数字にアルファベットを付した（1a・1b・・・）。

遺構の実測も遺物の取り上げ同様にトータルステーションを使用して実測を行った。

カメラはニコン FM 2 を使用し、撮影に使用したフィルムは 35mm のモノクロ、カラースライド、必要に応じてデジタルカメラを使用した。

第2節 調査経緯

1次調査（平成 15 年度）

5月 6 日 調査初日。機材を搬入し、試掘トレンチ（2×8m）を設定し、表土除去を開始した。

5月 7 日 昨日に引き続き表土除去を継続した。表土中より攪乱時の遺物が出土し、グリッドごとに一括で取り上げた。午後より雨天の為、遺物の水洗いを行う。

5月 8 日 設定したグリッドによる窯体が確認できなかったため、北東方向に 3×1.5m 拾張し、表土除去を行った。

5月 9 日～16 日 調査範囲が灰原層に相当し

ていたため、主要な遺物の点取りを行いながら、順次地山層まで掘り下げた。旧河川跡及び溝跡を検出した。

5月 20 日 調査区のセクション及び平面の写真撮影を行い、各種図面を作成した。

5月 21 日 調査区の埋め戻しを行い作業は終了した。

2次調査（平成 16 年度）

5月 10 日 調査初日。機材を搬入し、昨年に引き続き隣接する地域に調査区（5×8m）を設定し、表土除去を開始した。表土より出土した遺物は大グリッドごとに一括で取り上げた。表土直下に早くも窯体のプランが確認され（写真図版 2-1）、削平を受けていると考えられた。

5月 11 日 1次調査の試掘トレンチの一部を掘り下げ、攪乱層及び灰原層の確認をし、表土層及び攪乱層の除去を行う。また窯体の燃焼部を横断する形でトレンチャーによる堰が確認されたので、堰跡を掘り下げた遺跡状況の確認を行う。午後より五所川原市文化財審議委員による視察があり、発掘調査方法のご指導を受ける。

5月 12 日 昨日に引き続き表土（1 層の黒色土層上の攪乱層）の除去を行う。窯の壁部分が直立した状態である程度残存しており（最大幅約 1.8m、長さ 4m 弱）、その周辺（窯の内部も含む）の土壤が攪乱されていた。堰の部分の掘り下げを行ったところ、窯の断面が確認された。そこで窯のプランを縦断するようベルトを設定し、1 層の掘り下げを開始



写真 1 1次調査作業風景



写真 2 2次調査作業風景

したところで本日の作業は終了した。

5月14日 窯の長軸方向と短軸方向にベルトを設定し、窯の埋土及び灰原を掘り下げる。窯は焼成部の一部が残存しているのみで、窯尻部は削平されていた。燃焼部より焼きだしたと考えられる灰原が窯の下方に広がっており、その層中より炭化材のサンプルを採集した。また1mグリッド（東西方向a・b・c・・・、南北方向1・2・3・・・）を設定し、小グリッドごとに遺物の取り上げを行った。

5月18日 午前中は窯の東西ベルトの写真を撮影した後セクション図を作成した。その後東西ベルトの除去並びに窯周辺の堆積層の掘り下げを行う。午後より南北ベルトの写真撮影及びセクション図を作成後、ベルト除去途中で本日の作業は終了した。

5月19・20日 トータルステーションの基準点を移設し、窯の東西ベルトを除去し、床面を検出したが、床面が削平されていた。また従来壁面と考えていた窯壁も重機により原位置を保っておらず、どこまでが壁面か判明しないため、窯周辺の土壌を地山直上までさげて、浮いている窯壁は除去しながら、窯の正確なプランの検出につとめた。また、トータルステーションを利用して、発掘区の平面プランとセクションポイントを実測した。

5月25日 窯体左にある痕跡の完掘と包含層の掘り下げを行った。窯体の一部は黒色土の上に移動しているため、原位置を保っていないと考えられた。そのため地山まで掘り下げ、残存している窯体を残し、移動していると考えられる床面及び窯壁を除去する予定である。窯の下方も地山直上まで掘り下げたところ、攪乱が數ヵ所認められるが、地山直上のレベルで平面にならした。

5月26日 燃焼部下のプランは赤褐色の床面が残存しており、焚き口部も僅かに残存していることが確認された。また、昨日窯外部を地山まで掘り下げたところ、黒土の上に床面が乗っていることから、床面が重機等により原位置を保っていないと考えられた。そのため地山まで出して窯のプランを確認することにしたところ、窯体の床面は一部を除き掘削により削平されており、硬化した地山のみが残存していたため、その面でプランを確認している途中で本日の作業は終了した。

5月27日 焚き口部の下に広がる窯構築時の掘削面の検出を行った。その後窯内のベルトの除去及び焚き口部及びその下方の掘削面のセクションの写真撮影及び実測図の作成を行った。同時に灰原部分を旧トレンチのセクション図をもとに上層の攪乱部分の除去を行った。

5月28日 午前中は写真撮影のため、調査区全体のクリーニングを行い、正午写真撮影を行った。その後灰原部分の掘り下げと平面図をトータルステーションを使用して作成した。

6月1日～3日 調査区の平面図をトータルステーションを使用して作成した。午後より調査区のセンター（5cm）をトータルステーションとレベルを使用して作成した。

6月4日 写真撮影のため、午前中は調査区全体のクリーニングを行い、写真撮影を行った。その後窯構築時の部分まで断ち割り断面の写真撮影及び断面図を作成した。窯の床面はある程度掘り込んだ後地山混じりの土を張って平にしていることが判明した。床面が2枚確認されたため、構築は2回と考えられた。

6月9日 調査区の埋め戻しを行う。その後機材を搬出して発掘調査を終了した。

第3章 遺跡周辺の環境

遺跡の立地する高野地区は五所川原市中心市街地より、南東方向に約11kmの位置に所在する。ここは梵珠山系から延びる前田野目台地上の縁辺部に位置しており、地形分類上では低位段丘（GT II）面上である（図1）。この台地面は標高約35m前後であり、この下位に続く沖積平野と同様に比較的平坦面を有し、集落を営むのには有利な地形を呈している。この段丘は碇ヶ関浮石層（山口1993）相当層直下に輕石質砂、固結粘土、腐食質粘土（シルト）から構成されている。実際に遺跡

の分布範囲を見てみるとこのGT II面に立地しているものが多いことが解る。また周辺には現在溜池として使用されている前田野目川を塞き止めて作られた高野大溜池があり、水利の便も非常に良い場所である。現在は窯跡を作るには不適なほど標高差がないが、リンゴ畑を造成する際に平坦にしているとのことで、遺跡が営まれていた時期には緩傾斜面ではあるが、比較的起伏のある地形を呈していたものと考えられる。

広野遺跡周辺には、この低位段丘面と中位段丘面を中心として、同時期の遺跡が多数分布している。詳細は、半沢氏の論文（半沢 1998）に譲り、須恵器消費地遺跡の主要なものを概観していくことにする。

五所川原市内では、北から原子溜池を中心とする遺跡群、持子沢を中心に鶴川や限無の各遺跡群、沖積地に位置する実吉遺跡、東南端の桜ヶ経（1）・（2）遺跡、川崎遺跡、高野大溜池遺跡などが存在する。特に原子下溜池遺跡（4）遺跡や鶴川（2）・（4）・（12）遺跡では、ロクロピットを有する住居跡が検出されており、周辺の窯跡との関連性が高いと考えられる。

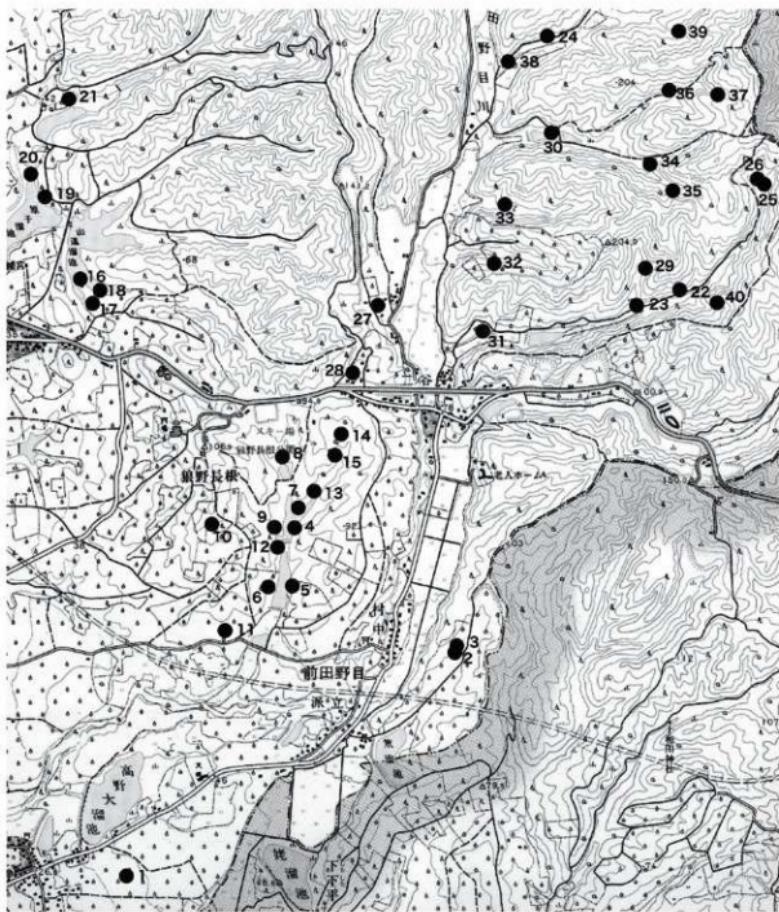
浪岡町では9世紀末～10世紀前半を中心とした大規模な集落遺跡である山元（2）・（3）遺跡、羽黒平遺跡、野尻遺跡群などが挙げられ、いずれも窯場周辺の遺跡と遜色ないほどに五所川原産須恵器を多く出土している遺跡である。特に野尻（1）遺跡では、壺の出土量が他の遺跡と比較すると多く、窯近隣の遺跡と比較してもあまり変化がないのが特徴である。つまり、前期において消費主体を占めていたのは、窯周辺の集落である可能性が高いと考えられる。

続く10世紀中葉以降の遺跡として源常平遺跡、高屋敷館遺跡などが挙げられ、この時期になると須恵器流通の変化に伴い、五所川原産須恵器の出土量も多くはなく、特に壺の出土量は激減する傾向になる。

図2に五所川原須恵器窯跡の位置図を示す。今年度分布調査の結果、新たにMD19号窯跡が1基発見され、合計40基となつた（各窯跡の詳述は、五所川原市教育委員会 2003 を参考）。



図1 KY1号窯跡周辺の地形分類図（水野・堀田 1983 をもとに作成）



No.	窓跡名	所在地	No.	窓跡名	所在地	No.	窓跡名	所在地
1	KY1号窓	五所川原市高野子広野	15	MZ12号窓	五所川原市持子沢字隠川	29	MD8号窓	五所川原市前田野目
2	SM1号窓	五所川原市前田野目字板ヶ崎	16	HK1号窓	五所川原市原子字山元	30	MD9号窓	五所川原市前田野目
3	SM2号窓	五所川原市前田野目字板ヶ崎	17	HK2号窓	五所川原市原子字山元	31	MD10号窓	五所川原市前田野目
4	MZ1号窓	五所川原市持子沢字隠川	18	HK3号窓	五所川原市原子字山元	32	MD11号窓	五所川原市前田野目
5	MZ2号窓	五所川原市持子沢字隠川	19	HK4号窓	五所川原市原子字山元	33	MD12号窓	五所川原市前田野目
6	MZ3号窓	五所川原市持子沢字隠川	20	HK5号窓	五所川原市原子字山元	34	MD13号窓	五所川原市前田野目
7	MZ4号窓	五所川原市持子沢字隠川	21	HK6号窓	五所川原市原子字紅葉	35	MD14号窓	五所川原市前田野目
8	MZ5号窓	五所川原市持子沢字隠川	22	MD1号窓	五所川原市前田野目字砂田	36	MD15号窓	五所川原市前田野目
9	MZ6号窓	五所川原市持子沢字隠川	23	MD2号窓	五所川原市前田野目字砂田	37	MD16号窓	五所川原市前田野目字前田野目山
10	MZ7号窓	五所川原市持子沢字隠川	24	MD3号窓	五所川原市前田野目山國有林	38	MD17号窓	五所川原市前田野目山國有林
11	MZ8号窓	五所川原市持子沢字隠川	25	MD4号窓	五所川原市前田野目字砂田	39	MD18号窓	五所川原市前田野目山國有林
12	MZ9号窓	五所川原市持子沢字隠川	26	MD5号窓	五所川原市前田野目字砂田	40	MD19号窓	五所川原市前田野目字砂田
13	MZ10号窓	五所川原市持子沢字隠川	27	MD6号窓	五所川原市前田野目字物ノ沢			
14	MZ11号窓	五所川原市持子沢字隠川	28	MD7号窓	五所川原市前田野目字大走			

図2 五所川原須恵器窓跡位置図（『青森県五所川原市全図』をもとに作成）

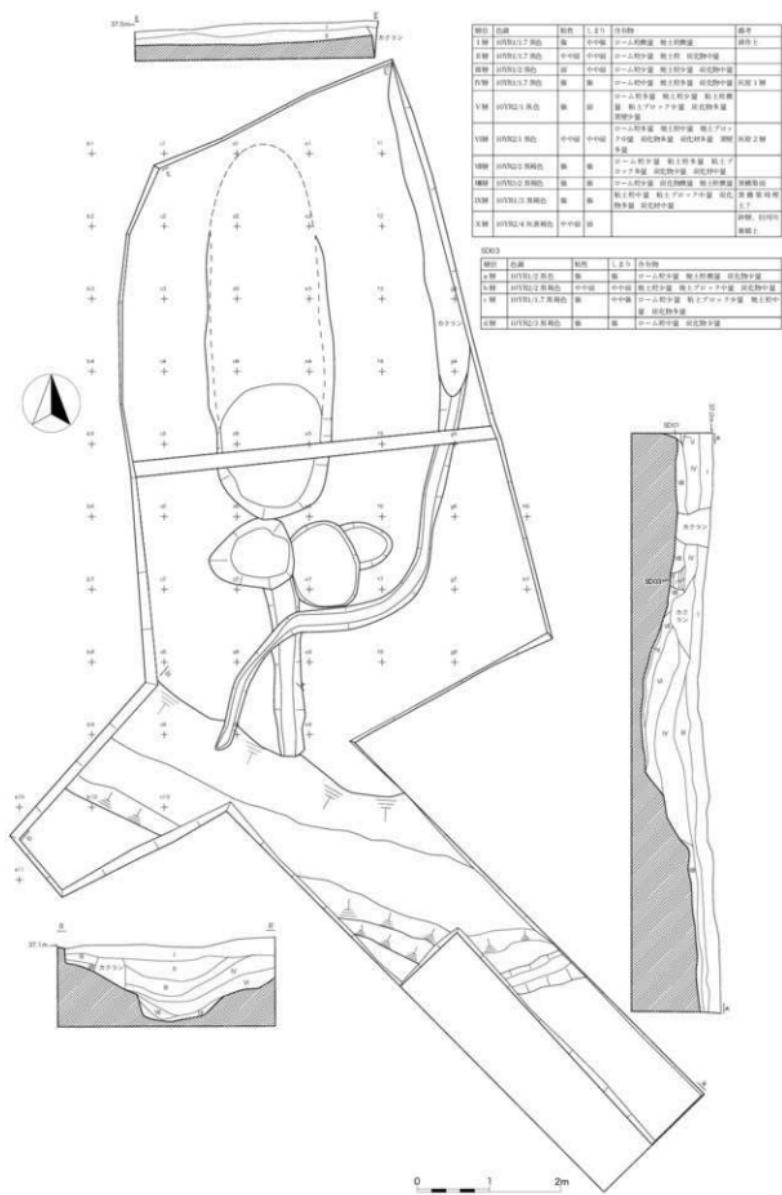


図3 KY1号窓跡調査区全図

第4章 検出遺構

第1節 窯跡(図4)

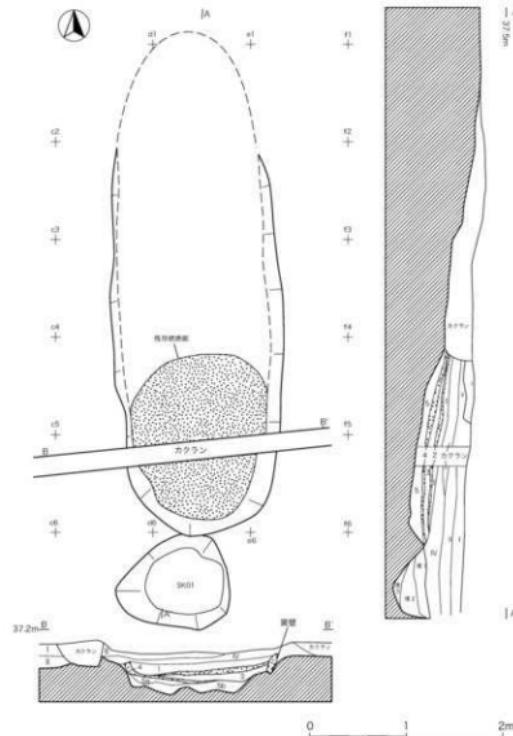
2004年度の調査で検出した。窯の残存状況は非常に悪く、燃焼部のみを残し焼成部は僅かにプラントが確認できるのみで、残存していた窯壁も現位置を保っていなかった。その理由としては、窯体内にリンゴを植樹する際に、窯体内の堆積土をすべて除去してしまったためである。

窯の構造は半地下水式の無階無段の窑窓であると考えられる。

燃焼部を横断するように排水のためのトレーニングがあり、それを利用して燃焼部の断面を観察したところ床面は2層確認され、少なくとも2回の操業が確認された(以下新しい窯をA窯、古い窯をB窯という)。燃焼部の残存長及び幅はそれぞれ上場から186cm、157cmを計り、勾配はA窯床面が平均6.9度、B窯床面が平均6.4度を計る。

窯構築時の面では、ロームブロック混じりの人為的堆積土が確認され、本窯跡は、①地山層をある程度大まかに掘り下げる。②次に掘り込んだロームブロック等により、整地する。③粘土を貼りB窯床面とするという3工程で燃焼部床面が構築されていた。A窯の床面は、B窯の灰原残土の上に粘土を貼り構築されていた。

残存している現位置を保っていない窯壁を見ると、上下方向に筒状の空洞が見られることから、支柱として、周辺の樹木を利用していたことが判明した(写真図版2-2)。



層位	色調	土質	粘性	しまり	食性物	備考
I層	10YR2/1 黄色	シルト	中	強	径1~5mmの焼土粒を中量、径10~30mmの焼土ブロックを少量。泥炭過片・窯壁片を多量に含む。	耕作土
II層	10YR2/1 黄色	シルト	中	中	径1~10mmの焼土粒を中量。泥炭過片・窯壁片を中量含む。	耕作土
VI層	10YR2/1 黄色	砂質シルト	中	弱	径10~50mmの炭化粒を多量。径1~10mmの焼土粒を中量含む。	炭化層
堆土1層	10YR4/1 暗灰色	シルト	中	弱	径1~10mmの炭化粒を多量。径1~5mmの焼土粒を中量に含む。	A窯床面
堆土2層	10YR4/4 暗色	砂質シルト	強	強	径1~5mmの焼土粒を多量に含む。	A窯床面
堆土3層	10YR4/4 暗灰色	シルト質砂	中	弱	径5~20mmの炭化粒を多量。径1~10mmの焼土粒を中量に含む。	B窯床面
堆土4層	10YR5/6 暗褐色	粘土質シルト	強	強	特になし。	日焼け床面
堆土5層	10YR3/2 暗褐色	シルト	強	強	径30mm前後のロームブロックを多量に含む。	窯壁地層
堆土6層	10YR2/1 黄色	シルト	強	強	径50mm前後のロームブロックを多量に含む。	窯壁地層

図4 KY1号窯跡

第2節 土壌 (図 5)

2004 年度の調査で窓体の下方に土壌を 3 基検出した。いずれも不整円形を呈し、新しい土壌から順に SK01・SK02・SK03 とした。いずれも窓操業時に一気に埋め戻されていたため、1・2 層は土壌別に区分することができず、一括埋土とした。窓築造時に使用した粘土を探掘した土壌である可能性も考えられる。

SK01：最も新しい土壌である。長軸 117cm、短軸 98cm、深さ 44cm を計る。堆積土はローム混じりの黒褐色土であり、人為的堆積土である。焼き口部直下であるため、作業場として利用されていた可能性が高く、非常に固く締まっていた。

SK02：SK01 によって切られており、正確な形状は不明であるが、長軸 123cm、短軸 97cm、深さ 31cm を計る。SK01 と同様に堆積土は非常に固く締まっていた。

SK03：SK02 によって切られており、正確な形状は不明であるが、短軸 68cm、深さ 22cm を計る。埋土は 1 層のみである。

第3節 溝跡 (図 6)

SD01：SK01 に切られており、全体のプランは不明であるが、幅 45cm、残存長 236cm を計り、旧河川へとのびる小規模な溝である。

埋土は 3 層確認され、いずれも窓焼成後の灰原層由来の埋土であり、窓操業時には機能していないものと考えられる。

SD02：SD01 よりも新しく、窓の東側を南北に通り、途中で向きを東西方向へと変えて SD01 を横切り、再び南北方向へと変えて旧河川へとのびている SD01 同様比較的小規模な溝跡である。溝の北側は農地造成の際に攪乱を受けたため、全体のプランは不明であるが、幅 30cm、残存長 637cm を計る。

埋土は 2 層確認されたが、下層は SD01 と同様窓焼成後の灰原層由来の層であるが、上層には火雜物はあまり含まれていなかった。そのため、窓操業時は灰原層形成時にある程度埋没してはいるが、機能していたものと考えられる。

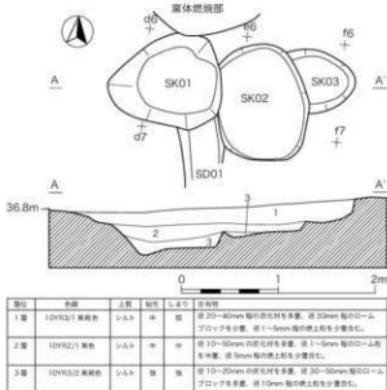


図 5 SK01・SK02・SK03

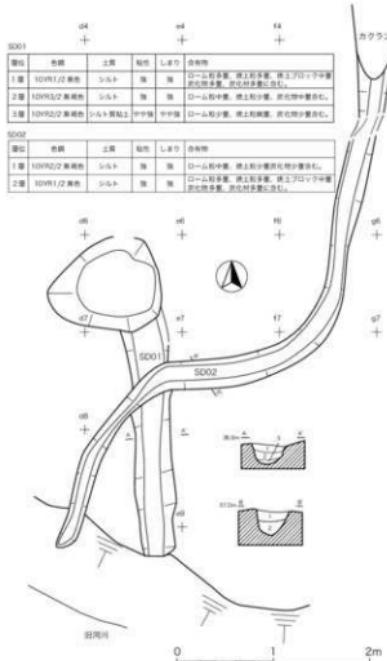


図 6 SD01・SD02

第5章 出土遺物

KY 1号窯跡では、その灰原部分及び窯周辺より多数の遺物が出土した。ここでは、窯跡に付随する須恵器のみを資料化するに留めた。遺物の記載内容及び属性は未資料化分も含めたものになっている。なお資料化はしていないが、少数の縄文土器、土師器もある。

1. 壺（第1図版1～3）

器形は直上口縁のものと外彎するものがある。口縁部の端面形は先細りのもの、丸みを帯びるものがある。全体で口縁部破片数8、個体数0.99であり、総出土数に占める割合は口縁部破片数で0.57%、個体数で0.83%と出土率は低い。口径は8.0～14.6cmとばらつきがある。成形技法は粘土紐輪積み成形の後、ロクロナデ整形である。底部は回転糸切り無調整である。

2. 蓋（第1図版4～7）

器形は直上口縁のものと外彎するものがある。口縁部の端面形は先細りで、口縁外面を面取り調整するもの、丸みを帯びるものがある。全体で口縁部破片数13、個体数1.64であり、総出土数に占める割合は口縁部破片数で0.93%、個体数で1.38%と出土率は低い。口径は9.2～11.6cmと比較的まとまりがみられる。成形技法は粘土紐輪積み成形の後、ロクロナデ整形であり、一部ケズリ調整が施されている個体もある。底部は回転糸切り無調整である。环の法量に比して小さいため、鉢あるいは壺1類の蓋として利用されたものと考えられる。

3. 小杯（第1図版8～10）

器形は直上口縁の個体（第1図版10）と外彎する個体（第1図版8・9）がある。口縁部の端面形は先細りのものと丸みを帯びるものがある。全体で口縁部破片数12、個体数1.85であり、総出土数に占める割合は口縁部破片数で0.86%、個体数で1.55%と出土率は低い。口径は9.2～12.2cmで、10cm前後の個体が多い。成形技法は粘土紐輪積み成形の後、ロクロナデ整形である。底部は回転糸切り無調整のものとその後ナデ調整が施される個体がある。

4. 环（第1図版11～23、第2図版24～38）

主体を占める器種であり、全体で口縁部破片数675、個体数64.75であり、総出土数に占める割合は口縁部破片数で48.31%、個体数で54.35%と出土率は半数を占める。器形は椀形を呈し、口縁部の形状により以下に示すように3類型に分類した（図7）。

I類型：口縁部が直上ないしは内彎気味に立ち上がる
るもの。



II類型：口縁部が外彎気味に立ち上がるもの。

III類型：口縁部が外彎するもの。

図7 环の器形分類図

口縁部の端面形はa類：先細りの形状を呈するも

の、b類：器厚に変化が無く先端部が丸みを帯びるもの、c類：玉縁状を呈するものの3類型に分類した（図8）。



成形技法はロクロによる水引き成形である。一部体部下半に手持ちヘラケズリが施される個体もある（第1図版8、写真3）。底部は回転糸切り無調整である。また底部の一部が剥落し、粘土板を重ねて使用したことが窺える個体も出土している（写真4）。

法量は図9のグラフに示す通り、口径に対する器高の比率は0.3から0.5の間に収束し、平均は0.38であり、口径15cmを前後して、2



写真3 手持ちヘラケズリ痕のみられる個体

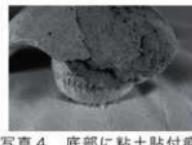


写真4 底部に粘土貼付痕のみられる個体

ついに分類が可能であると考えられる。また図 10 に示すように口径に対する底径の比率も器高と同様に 0.3 から 0.5 の間にはば収束し、平均は 0.39 であった。

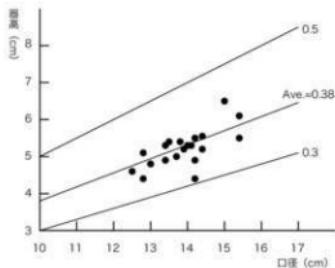


図 9 坯の器高・口径分布図

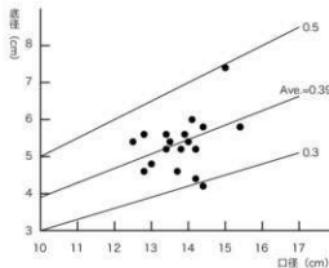


図 10 坯の底径・口径分布図

次に口径及び底径の度数分布図を示す(図 11, 12)。これによると口径は 12.4 ~ 16.8cm であり、平均 14.01cm である。14.0 ~ 14.5cm に分布のピークがあり、なだらかな単峰形の分布を示す。底径は口径とは若干異なり、4.0 ~ 7.5cm と分布の幅はあるものの、ほぼ 5.0 ~ 5.5cm の範囲内に集中している。このことから、坯の製作技法は 1 本の粘土の円柱から、ロクロによる水引き技法が使用されていたものと考えられる。

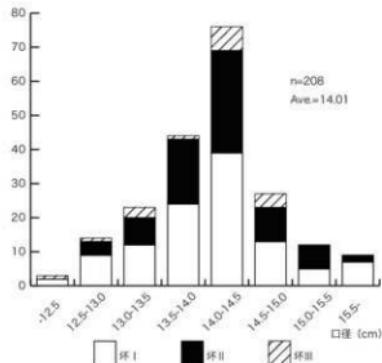


図 11 坯の口径度数分布図

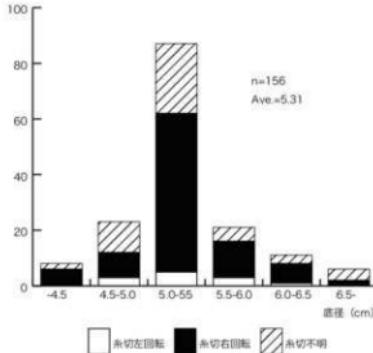
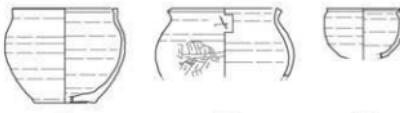


図 12 坯の底径度数分布図

5. 鉢 (第2回図版 39 ~ 42、第3回図版 43 ~ 52)

全体で口縁部破片数 93、個体数 7.83、総出土数に占める割合は口縁部破片数で 6.66%、個体数で 6.57% である。器形は体部に最大径を有し、頭部から口縁部の形状により以下の 3 類型に分類した(図 13)。

I 類：頭部から口縁部まで直上あるいはやや外側しながら立ち上がるものの。



II 類：頭部に明瞭な屈曲点を有し、口縁部は外側するものの。

III 類：口縁部が短く、口縁を僅かにつまみ出

図 13 鉢の器形分類図

しただけのもの。

口縁部の端面形は以下の5つに分類した(図14)。

a類: 口縁端部を外方向につまみ出したもの。鉢II・III類に対応する。

b類: 口縁端部まで器厚が変化せず、方形を呈するもの。

鉢I類に対応する。口縁端部の面取り調整の強弱により細分した。

c類: 口縁端部を上方向につまみ出した後、面取り調整が施され、断面が三角形を呈するもの。鉢I・II類に対応する。

d類: c類と同様の断面形を呈するが面取り調整の度合いが強く、隆帯を意識しているもの。鉢II類に対応する。

成形技法は粘土紐輪積み成形の後、ロクロナデ整形のものと、ロクロナデ整形後体部にケズリ調整を施す個体がある。底部は回転系切り無調整の個体と回転系切り後ナデ調整が施される個体がある。

図15に各類型別の鉢の口径分布図を示した。これによると口径は8.0~16.6cmとばらつきがあるが、11.0~11.5cmと13.0~13.5cmに分布のピークがあり、双峰性の分布を示していることから、法量の面でも細分できる可能性がある。また鉢III類は出土数が少ないので確定できないが、小型の個体に限られる器形であると考えられる。

6. 壺

体部に最大径を有し、明瞭な頸部を有する器形である。大きく分けて以下の3類型に分類された(五所川原市教育委員会 2003 pp. 56-57)。

6a. 壺I類(第3図版53~59、第4図版60~69)

いわゆる長頸壺である。全体で口縁部破片数182、個体数17.90、総出土数に占める割合は口縁部破片数で13.03%、個体数で15.02%であり、壺に次いで主体を占める器種である。

口縁部の端面形は以下の5つに分類した(図16)。

a類: 上端と口縁外面を軽く面取りすることにより、断面は方形を呈する。

b類: 基本形態はa類と同様であるが、強い面取り調整によって隆帯を意識しているもの。

c類: 断面が三角形を呈するもの。下方向のつまみ出しの有無により細分した。

d類: 折返口縁を有するもの。面取り調整の違いにより細分した。

e類: 断面が丸みを帯び、殆ど調整はされない。

成形技法は粘土紐輪積み成形の後、ロクロナデ整形後体部にケズリ調整が施されている。一般的に体部に施されたケズリ調整は須恵器を静止した状態での縦方向ないしは横方向の調整であるが、当窯跡では、

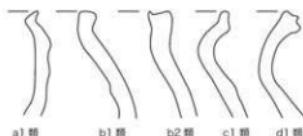


図14 鉢の各種端面形
(五所川原市教育委員会 2003より抜粋)

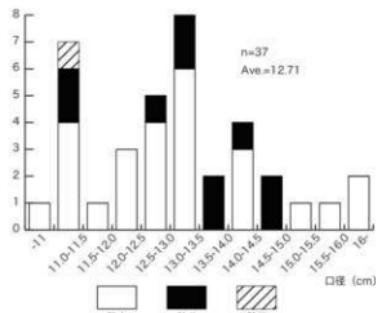


図15 鉢の口径度数分布図



図16 壺I類の各種端面形
(五所川原市教育委員会 2003より抜粋)



写真5 回転ヘラケズリ調整された個体

そのケズリ調整の後、体部下間にロクロを使用した回転ヘラケズリが施される個体も存在する（写真5）。

頸部と体部の境界付近にリング状突帯と呼ばれる隆帯（いすれも貼付けではなく、上下端を面取りすることにより作り出されたもので、形骸化している。）があるものの、頸部と体部には明瞭な接合痕が見られないことから、頸部と体部を別作りせず、一緒に製作しているのではないかと考えられる。また、頸部を細くするために絞り込んだ痕跡が明瞭に見える個体が多い。

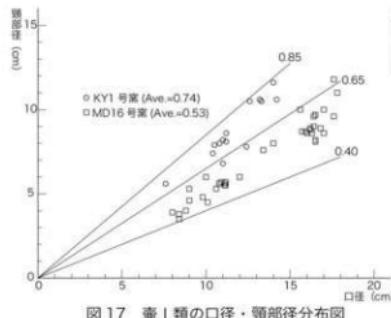


図17 壺I類の口径・頸部径分布図

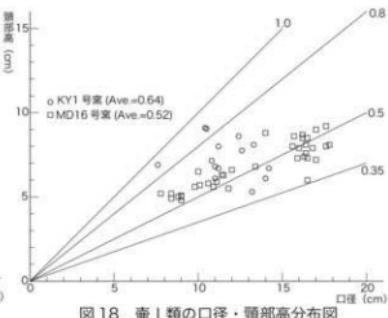


図18 壺I類の口径・頸部高分布図

底部はナデ調整、ケズリ調整、細い工具で放射線状に削り出した後、高台状に粘土紐を貼付けたいわゆる菊花文と呼ばれる調整が施される。

本窯跡出土壺I類は口径に対する頸部径の比率がMD16号窯跡出土壺I類と比較して高く、およそ0.65を境にして区分が可能である。故に初期段階における壺I類は、あまり広口化が進行しておらず、時期が下るにつれて広口化が進行していくものと考えられる。また消費地において出土した壺I類の口径と頸部径の比率を計ることによりある程度製作時期の推定が可能ではないかと考えられる（図17）。口径に対する頸部高的比率を見るとMD16号窯跡がおよそ0.5前後で正比例であるのに対し、逆に本窯跡は口径が大きくなるにつれて頸部高が逆に低くなる反比例の様相を呈する。特に最も大きい壺Ic類での短頭化が著しい（図18）。この傾向は前期II期のMD7号窯跡まで続いている（五所川原市教育委員会 2003 p.133 参照）。

図19は壺I類の口径度数分布を示した。これによると本窯跡で最も多く製作されたのは、口径9~12cmまでの壺Ib類であり、壺Ia類（口径9cm未満）及び壺Ic類（口径12cm以上）はあまり製作されていない。端面形ではa・b類が主体を占め、次いでc類が多く、本窯跡特有のd・e類は殆ど製作されていないことから、この時期に既にこの端面形の使用は衰退しており、次の持子沢窯跡支群では採用されなかつたものと考えられる。

6b. 壺II類（第4図版70・71、第5図版72~78）

いわゆる広口短頭壺であり、全体で口縁部破片数90、個体数8.73、総出土数に占める割合は口縁部破片数で6.44%、個体数で7.32%である。

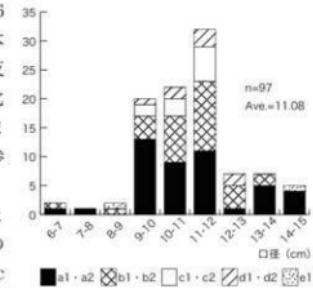


図19 壺I類の口径度数分布図



図20 壺II類・壺I類の各種端面形

口縁部端面形は以下の4つに分類した(図20)。

- a類:壺I類と同様に断面方形を呈するもの。
- b類:基本形態はa類と同様であるが、強い面取り調整によって隆帯を意識しているもの。
- c類:断面が三角形を呈するもの。下方向のつまみ出しの有無により細分した。
- d類:口縁端部まで器厚が変化せず、方形を呈するもの。面取り調整の違いにより細分した。鉢のb類と酷似する。

成形技法は壺I類と同様に粘土紐輪積み成形の後、ロクロナデ整形後体部にケズリ調整が施されている。

壺II類の口径は口径15~16cmを中心として、単峰性の分布を示している(図21)。端面形を見ると壺I類と同様にa・b類が多く全体の68.9%を占める。次いでd類が多く20%、c類は11.1%にすぎない。

6c. 壺III類(第5図版79)

短く直上する頸部を有し、体部が張り出す器形である。底部まで残存している個体がないため詳細な器形は不明であるが、鉢I類を大型にした器形であると考えられる。KY1号窯特有の器形である。

壺の底部について各種の調整ごとの出現頻度を図22に示す。主体を占めるのは菊花文調整であり、全体の51.7%を占める。以下多い順にナデ調整(19.5%)、ケズリ調整(9.8%)、タタキ調整(8.0%)、砂底無調整(7.5%)、回転糸切無調整(3.5%)である。

7. 瓶

短い頸部を有し、体部が張り出す器形である。底部は丸底のものが多い。成形技法は粘土紐輪積み上げ後タタキ成形が施されている。口頸部はタタキ成形の後、ロクロナデが施される。法量の違いにより、2類型に細分した。

壺I類:口径が20cm前後のもの。一般的に「中壺」と呼ばれるもの。

壺II類:口径が40cm以上のもの。一般的に「大壺」と呼ばれるもの。

7a. 壺I類(第5図版80、第6図版81~87、第7図版88)

全体で口縁部破片数102、個体数8.29、総出土数に占める割合は口縁部破片数で7.30%、個体数で6.96%である。

口縁部の端面形は壺II類と同様である(図20)。口径の分布を見ると平均は21.86cmであるが、平均値を中心として、下は15.6cm、上は27.6cmと他の器種と比べると口径にばらつきが生じている。各種端面形ごとにみても、同様の傾向が窺える(図23)。

7b. 壺II類(第7図版89・90)

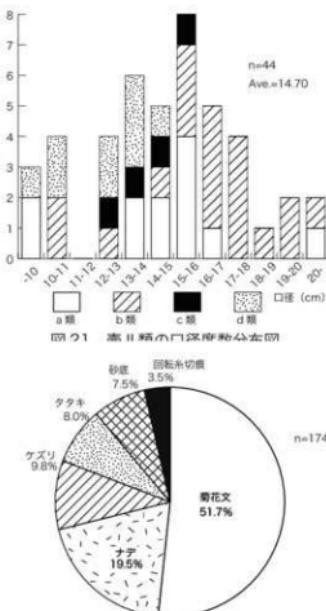
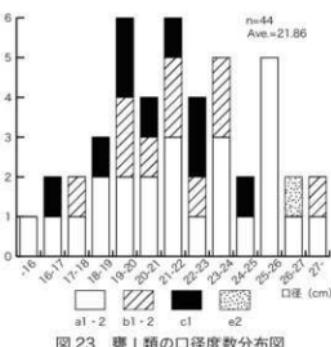


図22 壺底部調整別組成図



全体で口縁部破片数 64、個体数 1.58、総出土数に占める割合は口縁部破片数で 4.58%、個体数で 1.33% である。

口縁部の端面形は以下の 4 つに分類した（図 24）。

a 類：断面は三角形を呈し、隆帯をつくり出さないもの。壺 II 類・甕 I 類の c 類に類似する。

b 類：断面は菱形を呈し、沈線を施すことにより、隆帯を意識しているもの。

c 類：断面は方形を呈し、沈線を施すことにより、隆帯を意識しているもの。

d 類：口縁部上面端部の面取りが弱く、断面は三角形を呈するものの。沈線を施すことにより、隆帯を意識しているもの。

各端面形の組成（図 25）は、b 類が最も多く全体の 39.7% を占め、以下 a 類（24.1%）、d 類（19.0%）、c 類（17.2%）である。MZ 支群段階までしか見られない a 類が全体の 4 分の 1 を占めることから、初期段階では口縁部に沈線を入れない端面形を有する器形が多く作られ、端面形の画一化が進んでいないと考えられる。

8. 土師器様須恵器（第 7 図版 91～95）

器形及び胎土が土師器の長胴甕と同様であるが、還元色を呈し、須恵器窯で焼成された個体である。全体で口縁部破片数 158、個体数 5.57、総出土数に占める割合は口縁部破片数で 11.31%、個体数で 4.68% である。

口縁部から頸部にかけての器形により、以下の 3 類型に分類した。

I 類：明瞭な頸部を有せず、直上あるいはなだらかに外彎するもの。

II 類：頸部から口縁部にかけて外彎するもの。

III 類：明瞭な屈折点を有し、口縁部が外反するもの。

口縁部端面形は以下の 4 つに分類した（図 26）。

a 類：上端と口縁外面を軽く面取りすることにより、断面は方形を呈する。

b 類：断面が三角形を呈するもの。

c 類：頸部から口縁部まで器厚に変化が無く、調整が殆ど施されないもの。

d 類：口縁端部にかけて先細りになるもの。

土師器の器形別の組成は II 類型が最も多く全体の 61.8% を占め、次いで III 類型が 27.4% であり、I 類型は 10.8% にすぎない。また、各端面形の組成では、面取り調整を殆ど行わない簡素な作りの c 類が各器形において半数近く、全体でも 49.0% を占めている。次いで b・d 類がほぼ同様の割合であり、全体では b 類は 23.5%、d 類は 19.6% を占める。壺や甕の端面形に類似する a 類は II 類型のみで確認され、全体に占める割合も 7.9% と低い値になっている（図 27）。

以上のことから、土師器様須恵器の器形及び端面形は、同時期に製作されている土師器とあまり変化はないものと考えられる。ただし端面形においては須恵器に見られる a・b 類が全体の 3 割を占



図 24 條 II 類の各種端面形
(五所川原市教育委員会 2003 より抜粋)

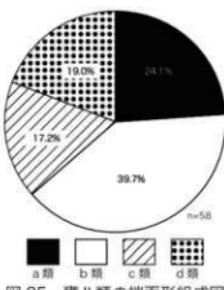


図 26 十師器様須恵器の各種端面形

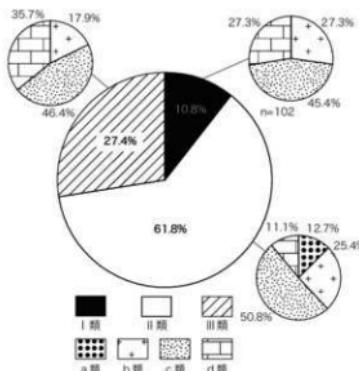


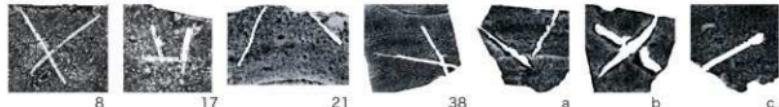
図 27 土師器様須恵器の器種組成

めることから、須恵器製作技法の影響を受けているものと考えられる。

9. ヘラ記号

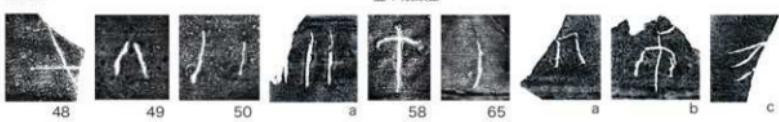
各種ヘラ記号を図28に掲載する。ヘラ記号の記される破片数が今回の調査で45点しか出土しておらず、中澤氏の指摘どおり、他の窯跡と比較して圧倒的に少ないので特徴である（中澤 2004）。特に壺に関しては全ての壺の破片の中でも、ヘラ記号が確認されたのは僅か7点のみであり、総口縁部破片数の1.0%に過ぎない。多く記されている壺I類・壺II類でさえ各々総口縁部破片数の8.2%、9.8%に過ぎない。従ってヘラ記号は、KY1号窯期には記されない個体が一般的であり、窯数が飛躍的に増加する次期のMZ支群で、ヘラ記号が殆どの個体に記されるようになる。以上のことからヘラ記号は、需要の増加に伴い須恵器生産が安定して行われるようになったMZ支群（前期I期）から

壺体部

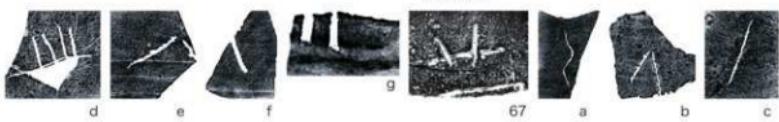


鉢頭部

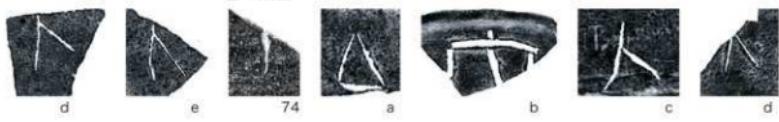
壺I類頭部



壺I類肩部



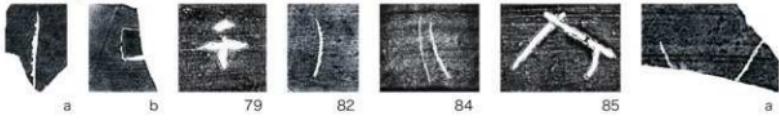
壺II類頭部



壺II類肩部

壺III類

壺I類頭部



壺I類肩部 壺II類頭部

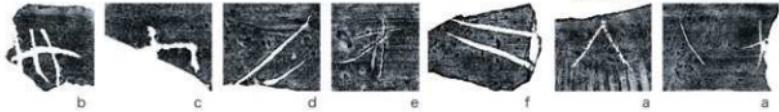


図28 各種ヘラ記号

(図中の算用数字は遺物番号に対応、アルファベットは資料化していない破片資料。縮尺不同)

ら一般化すると考えられる。

ヘラ記号の種類を見ると圧倒的に多いのは2本の直線の一端を合わせて山形にした記号が全体の30.3%を占め、次いで「丶」が18.2%で「×」、「|」が9%で続く。文字と認識できるものは「才」のみであった。各器種別においてもヘラ記号の種類にまとまりはみられなかった。

10. 窯別の器種組成の変化

KY1号窯の器種組成が昨年度報告した組成比率と大きく変わったために再度窯別の器種組成を掲載する（図29）。

これによると食膳具に対する貯蔵具の割合がKY1号窯期では1:0.6であるが、MZ6・7号窯期にはその割合が拮抗し、MD16号窯期には1:23.5と貯蔵具の占める割合が圧倒的に高くなる。このことから、当初周辺の消費地への供給を目的としていたため、最も需要の高い食膳具を中心に生産されていたものが、供給範囲の変化に伴い、B-Tm降下以前のMD7号窯期までは緩やかに貯蔵具の比率が高くなる。そして、B-Tm降下後に食膳具の生産は完全に衰退し、貯蔵具中心の生産体制へと変化していくことになる。この10世紀中葉が五所川原市須恵器の生産体制の一大変遷であると考えられる。

また土師器を須恵器窯で焼成している時期が前期Ⅰ期までであることから、窯操業当初は、須恵器工人とロクロ土師器工人の結びつきが強いものと考えられる。

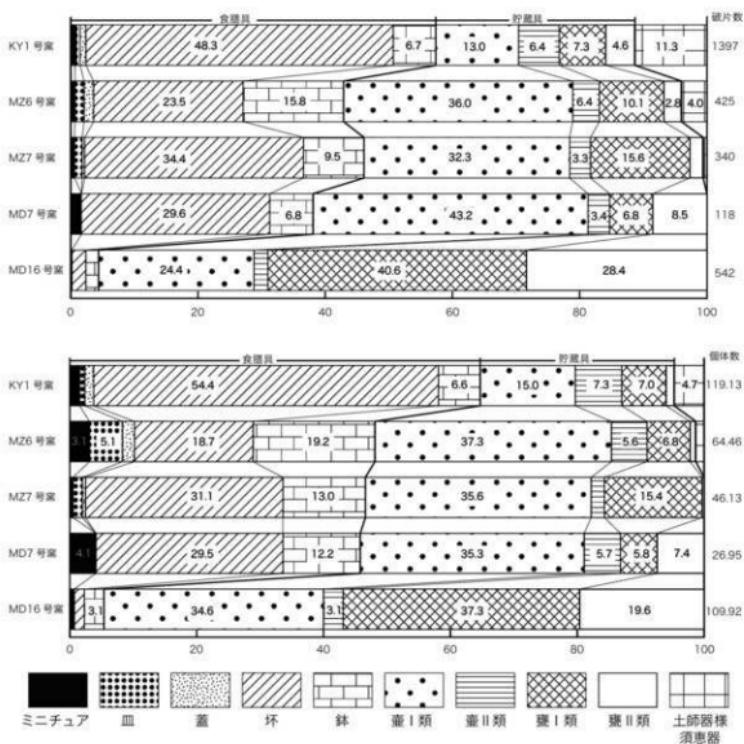
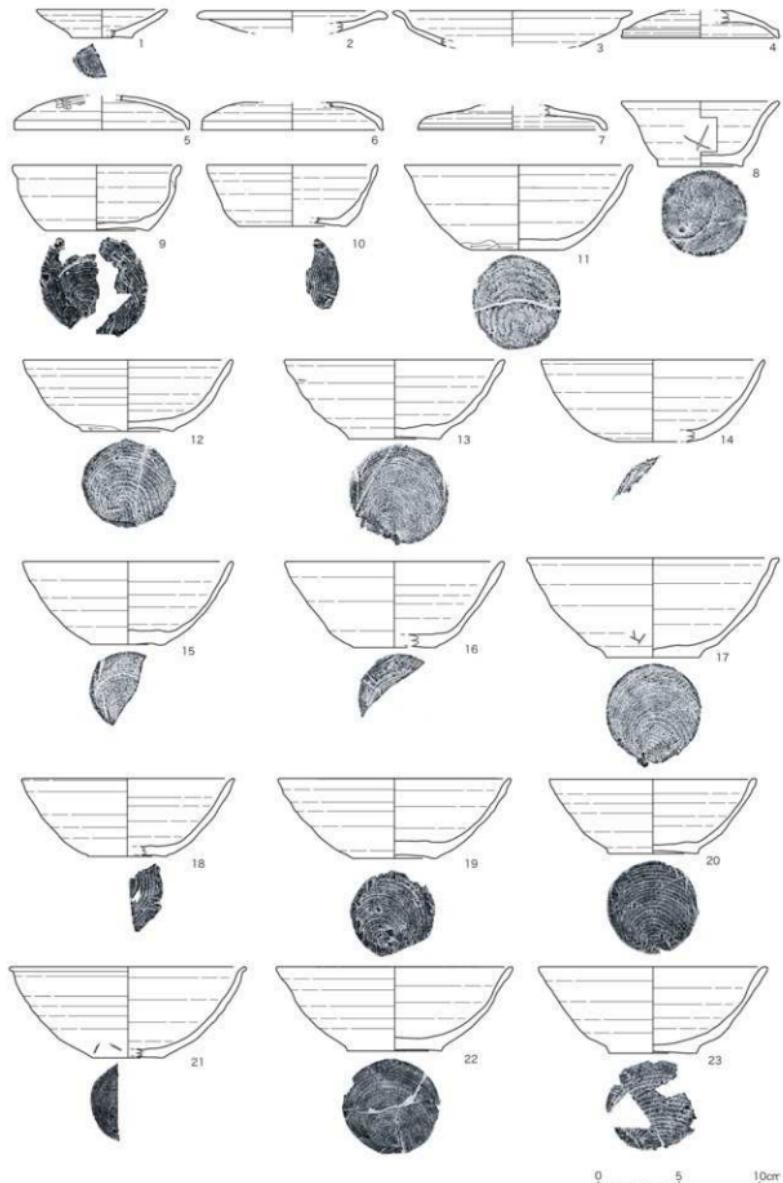
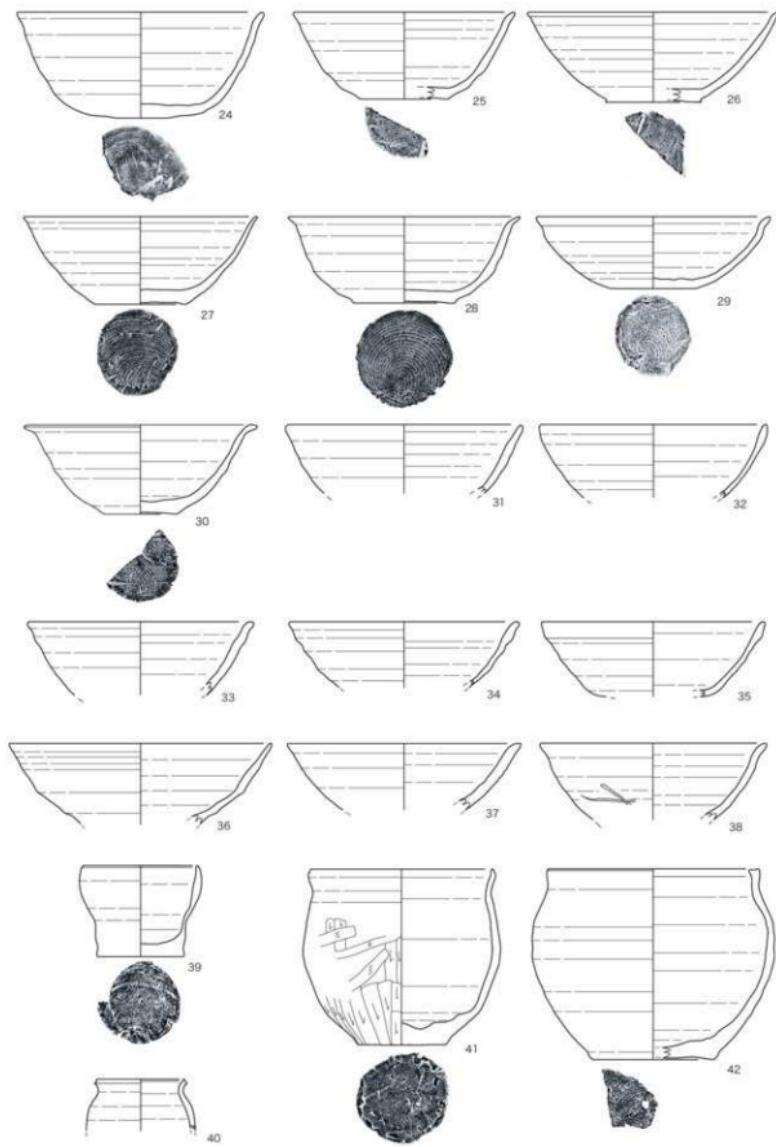


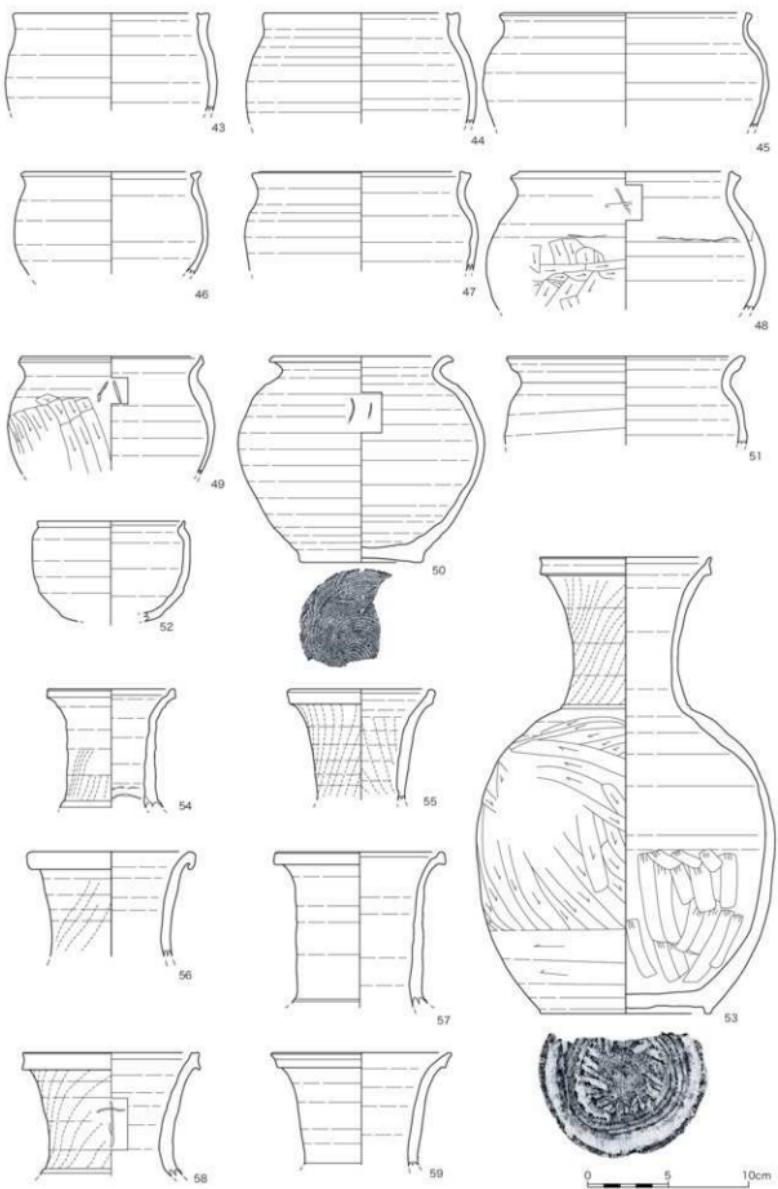
図29 窯別の器種組成（五所川原市教育委員会 2003を一部改変）



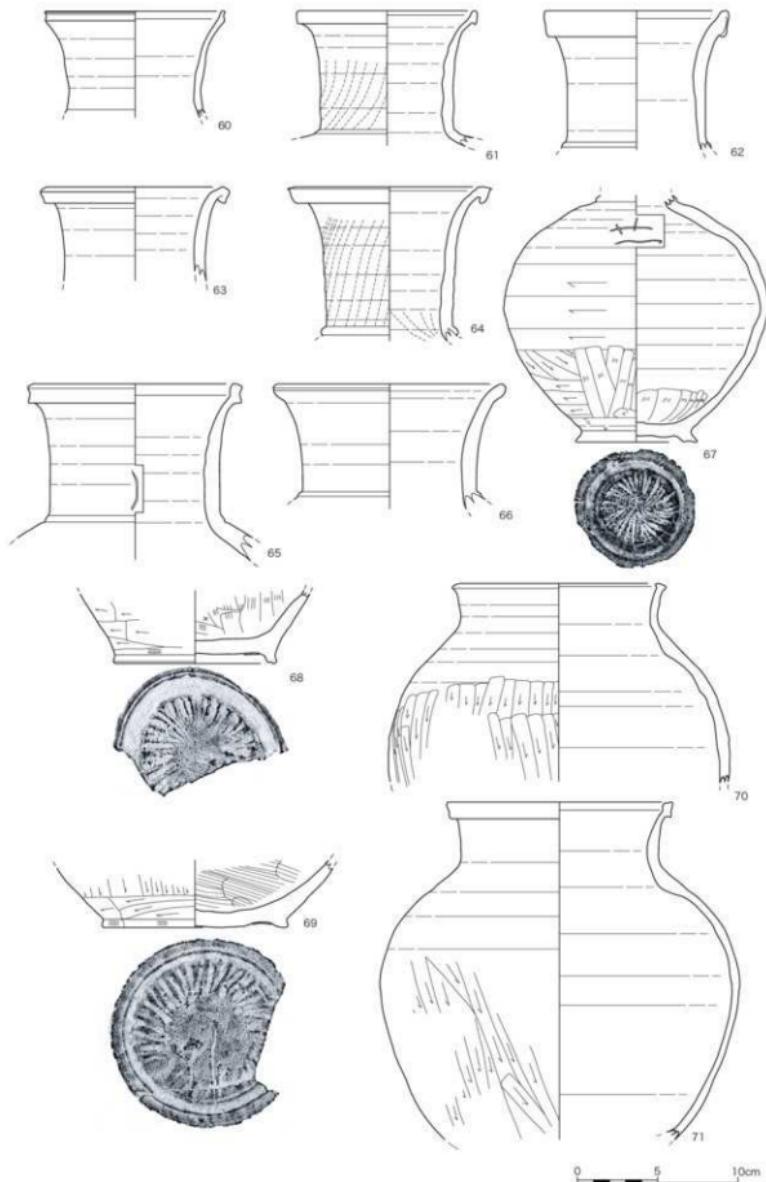
第1図版 KY1号墓跡出土須恵器 (1)



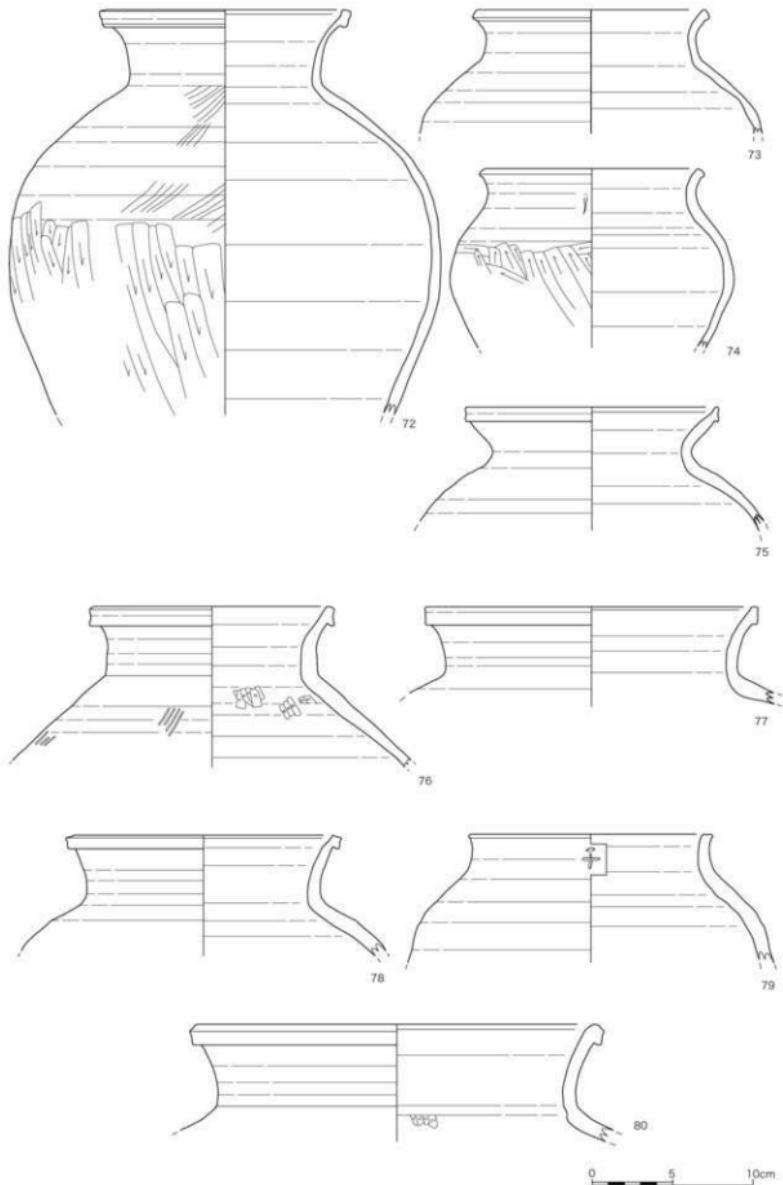
第2図版 KY1 号窯跡出土須恵器 (2)



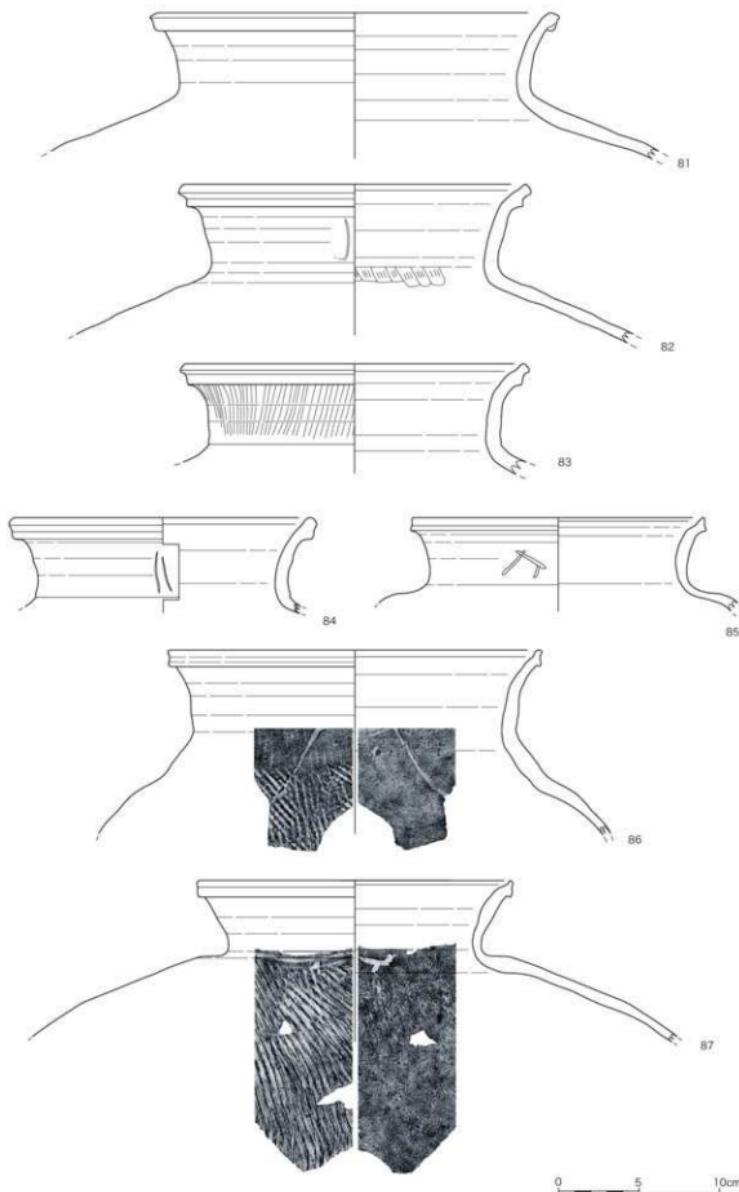
第3図版 KY1号窯跡出土須恵器(3)



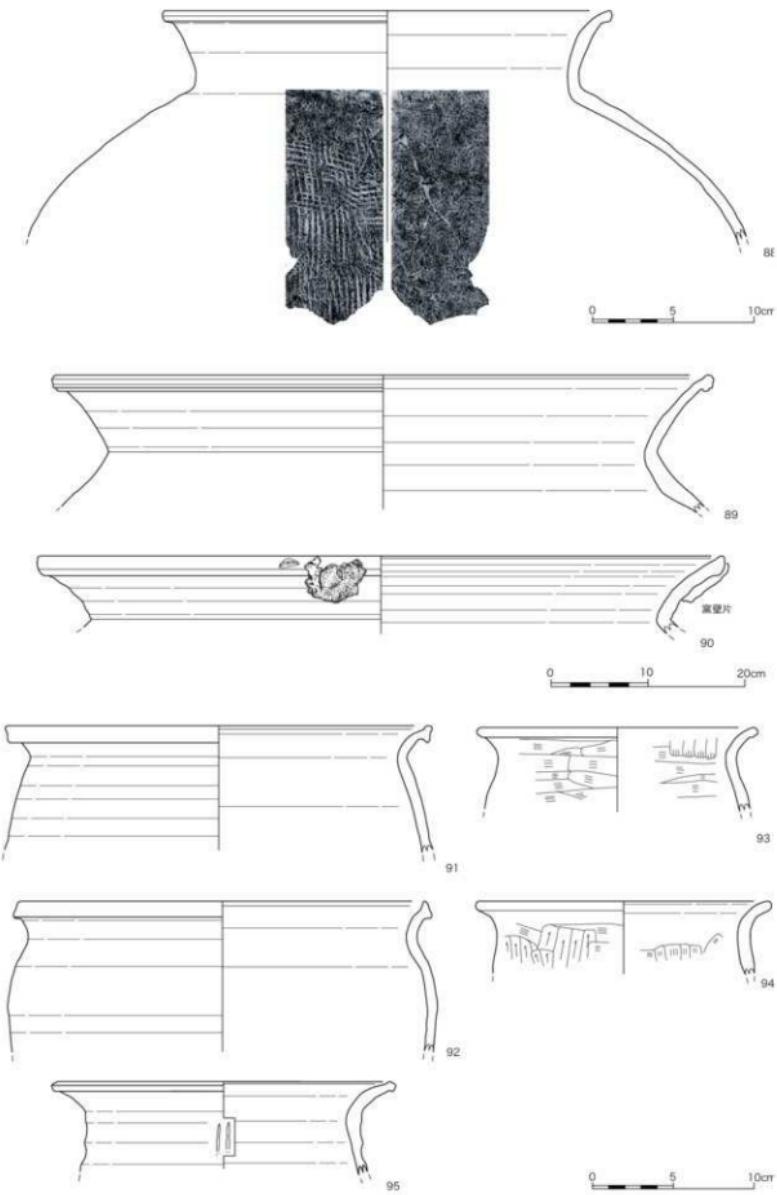
第4図版 KY1号窯跡出土須恵器 (4)



第5図版 KY1号窯跡出土須恵器(5)



第6図版 KY1号窯跡出土須恵器 (6)



第7図版 KY1号窯跡出土須恵器(7)

表1-1 KY1 号窓跡出土須恵器観察表 (1)

団番 No.	年度	グリッド	出土層位	基種	類型	残存部位	断面形	調査			主 要 性 能	地成	古物	備 考		
								体部	底面	口径						
1	2003	C1	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	8.0	1.7	3.7	1	小腰、 海綿骨針	
2	2003	BB	灰原1層	Ⅲ	I	口縁～体部	b	ロクロ	ロクロ		11.6			1	小腰、 海綿骨針	
3	2003	BS	灰原1層	Ⅲ	I	口縁～体部	b	ロクロ	ロクロ		14.6			1	小腰、 海綿骨針	
4	2004	c5・e5	1・II層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ		9.6	1.65	3.8	1	小腰、 海綿骨針	
5	2004	a10・e7	1・II層	Ⅲ	I	口縁～体部	a	ロクロ	ロクロ	ロクローケツリ ロクロ	10.6			1	石室、小腰、 海綿骨針	
6	2003	C1・d5	灰原1層	Ⅲ	I	口縁～体部	a	ロクロ	ロクロ		11.0			1	石室、小腰、 海綿骨針	
7	2004	d5	埋土5層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ ロクロ	11.6	2	4.4	1	小腰、 海綿骨針	
8	2003	c 2・c3	灰原1層 灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	ナデ ロクロ	9.6	4	5.2	1	石室、小腰、 海綿骨針	
9	2004	c・d	1・II層 灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	10.4	4.1	6.3	1	石室、小腰、 海綿骨針	
10	2003	A e7	1・II層 灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	12.2	3.8	6.6	1	石室、小腰、 海綿骨針	
11	2003	BS	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	ロクローケツリ ロクロ	13.9	5.2	5.6	1	小腰、 海綿骨針	
12	2003	BS	灰原3層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	12.8	4.4	5.5	1	小腰、 海綿骨針	
13	2003	A2・BB 不明	1層 灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	13.4	4.9	5.6	1	小腰、 海綿骨針	
14	2003	C3	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	13.7	5	4.6	3	石室、小腰、 海綿骨針	
15	2003	B3・B6	灰原1層 埋土5層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	12.8	5.1	4.6	1	小腰、 海綿骨針	
16	2003	A2	灰2層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	13.4	5.3	5.2	1	小腰、 海綿骨針	
17	2003	B6・B7	1層	Ⅲ	I	口縁～底部	c	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	15.4	6.1	5.8	1	小腰、 海綿骨針	
18	2004	c6	1層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	13.0	4.8	4.8	1	石室、小腰、 海綿骨針	
19	2003	BS b9	灰原1層 0層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	14.2	4.9	5.2	1	小腰、 海綿骨針	
20	2003	B2 d4	灰原1層 埋土3層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	12.5	4.6	5.4	1	石室、小腰、 海綿骨針	
21	2004	c4・d	1層	Ⅲ	I	口縁～底部	c	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	14.4	5.95	4.2	3	小腰、 海綿骨針	
22	2003	西夏	1層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	14.4	5.2	5.8	1	石室、小腰、 海綿骨針	
23	2004	B4・d5	Ⅲ・灰原 1層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	14.0	5.3	5.4	3	石室、小腰、 海綿骨針	
24	2003	B5・B7	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	15.0	6.5	7.4	2	石室、小腰、 海綿骨針	
25	2003	A5・A6	灰原1層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	13.5	5.4	5.4	1	石室、小腰、 海綿骨針	
26	2003	B3・B4・B5	灰原1層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	15.4	5.5	5.8	1	石室、小腰、 海綿骨針	
27	2003	B3・B6・C9 V1・V6	灰原1・2層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	13.8	5.4	5.2	1	石室、小腰、 海綿骨針	
28	2004	f7	2層	Ⅲ	I	口縁～底部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	14.1	5.3	6	3	石室、小腰、 海綿骨針	
29	2003	A2・B6	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	14.2	4.4	5.2	1	小腰、 海綿骨針	
30	2004	b9	灰原1層	Ⅲ	I	口縁～底部	b	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	14.2	5.5	4.4	1	小腰、 海綿骨針	
31	2003	A・C	1層・灰1 層	Ⅲ	I	口縁～体部	b	ロクロ	ロクロ		14.2			1	石室、小腰、 海綿骨針	
32	2003	A2・B7-B	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～体部	a	ロクロ	ロクロ		13.8			1	石室、小腰、 海綿骨針	
33	2003	A2・B5	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～体部	b	ロクロ	ロクロ		13.8			1	石室、小腰、 海綿骨針	
34	2003	S3.8	灰原1・2層	Ⅲ	I	口縁～体部	b	ロクロ	ロクロ		14.0			1	石室、小腰、 海綿骨針	
35	2003	BS	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～体部	b	ロクロ	ロクロ		13.6			1	石室、小腰、 海綿骨針	
36	2004	c4	1層	Ⅲ	I	口縁～体部	a	ロクロ	ロクロ		16.0			3	石室、小腰、 海綿骨針	
37	2003	A	腰丸	Ⅲ	I	口縁～体部	b	ロクロ	ロクロ		14.2			1	小腰、 海綿骨針	
38	2003	B5・B7	灰原1・2層 埋土5層	Ⅲ	I	口縁～体部	b	ロクロ	ロクロ		13.8			1	小腰、 海綿骨針	
39	2003	BB・C2	灰原1・2層 灰原2層	Ⅲ	I	口縁～体部	a	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	7.0	7.5	5.3	1	石室、小腰、 海綿骨針	
40	2004	不明	1層	Ⅲ	I	口縁～体部 上半	b2	ロクロ	ロクロ		5.6			1	小腰、 海綿骨針	
41	2003	B1・B5 b6	灰原1・2層	Ⅲ	I	口縁～底部	c1	ロクロ	ロクローケツリ ロクロ	クズリ	11.4	12.1	10.8	5.2	1	石室、小腰、 海綿骨針
42	2003	B3・~7	灰原1・2層 V層	Ⅲ	I	口縁～底部	b2	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	12.9	14.7	11.8	7.2	1	石室、小腰、 海綿骨針
43	2003	C1	灰1・2層	Ⅲ	I	口縁～体部	b2	ロクロ	ロクロ		12.1	13.0			1	小腰、 海綿骨針
44	2003	B4・C1・CB	灰原1・2層 埋土5層	Ⅲ	I	口縁～体部 上半	b2	ロクロ	ロクロ		12.1	14.2			1	石室、小腰、 海綿骨針
45	2003	B3	灰原2層	Ⅲ	I	口縁～体部 上半	b1	ロクロ	ロクローケツリ ロクロ		15.4	17.5			2	石室、小腰、 海綿骨針
46	2003	B2	灰原1層	Ⅲ	I	口縁～体部	b2	ロクロ	ロクロ		11.8	11.9			1	小腰、 海綿骨針
47	2003	BB c4・e5	1層	Ⅲ	I	口縁～体部 下半	b2	ロクロ	ロクロ		13.3	14.3			1	石室、小腰、 海綿骨針
48	2003	BB	灰原1層	Ⅲ	I	口縁～体部 下半	b1	ロクロ	ロクローケツリ ロクロ		14.0	17.1			1	石室、小腰、 海綿骨針
49	2003	B3・B6 b5・c6	灰原1・2層 埋土4・5層	Ⅲ	I	口縁～体部 下半	c1	ロクロ	ロクローケツリ ロクロ		11.2	12.6			1	石室、小腰、 海綿骨針
50	2004	C2・C3 f5	1層	Ⅲ	I	口縁～底部	d	ロクロ	ロクロ	回転あわせ切 ロクロ	11.1	15.1	12.7	2	石室、小腰、 海綿骨針	

表1-2 KY1号墓跡出土須恵器観察表(2)

登録No.	発掘年度	グリッド	出土層位	基盤	種類	保存状態	場所形	調査			法			既成	含む物	備考	
								口縁部	底部	表面	口径	底径	高さ				
51	2004	c10	V層	林	II	口縁～体部上半	c2	ロクロ	ロクロ	表面	14.6			1	石英、小縫 海綿骨針		
52	2003	B-C1	I層 不明	林	II	口縁～体部下半	a1	ロクロ	ロクロ	表面	11.0			1	小縫 海綿骨針	自然施	
53	2003	B6	Ⅲ層・灰層 Ⅳ・V層	森	I・b	口縁～底部	c2	ロクロ	ロクロ～ケズリ ロクロ～ナヂ	裏花文 ^c ナヂ	10.4	18.2	28.1	10.0	1	石英、小縫 海綿骨針	縫部に絞り無、体部下半田目へラ ケズリ
54	2003	B1・C2	灰層1.2層	森	I・a	口縁部	a1	ロクロ	ロクロ	表面				7.6	1	石英、小縫 海綿骨針	縫部に絞り無
55	2003	B1	灰層1層	森	I・a	口縁部	a1	ロクロ	ロクロ	表面				9.0	1	石英、小縫 海綿骨針	縫部に絞り無
56	2003	B3・B4	V・V層	森	I・b	口縁部	d1	ロクロ	ロクロ	表面				10.0	1	石英、小縫 海綿骨針	縫部に絞り無
57	2003	A	I層	森	I・b	口縁部	a1	ロクロ	ロクロ	表面				10.5	1	小縫 海綿骨針	自然施
58	2003	B2	灰層1層	森	I・b	口縁部	b1	ロクロ	ロクロ	表面				10.8	1	小縫 海綿骨針	ヘラ記号、縫部に絞り無、自然施
59	2003	B7	灰層1層	森	I・b	口縁部	a2	ロクロ	ロクロ	表面				11.0	1	石英、小縫 海綿骨針	自然施
60	2003	C1	I層	森	I・b	口縁部	c1	ロクロ	ロクロ	表面				11.0	1	小縫 海綿骨針	
61	2003	A2・B7	灰層1.2層	森	I・b	口縁～体部上半	a1	ロクロ	ロクロ	表面				11.2	1	小縫 海綿骨針	縫部に絞り無、自然施
62	2003	C2	灰層2層	森	I・b	口縁部	a1	ロクロ	ロクロ	表面				11.2	1	石英、小縫 海綿骨針	自然施
63	2003	砂土	Ⅲ層	森	I・b	口縁部	d2	ロクロ	ロクロ	表面				11.6	3	石英、小縫 海綿骨針	
64	2004	d5	灰層1層	森	I・b	口縁部	d1	ロクロ	ロクロ	表面				12.4	3	石英、小縫 海綿骨針	縫部に絞り無
65	2003	C1	I層 V層	森	I・c	口縁～体部上半	a1	ロクロ	ロクロ	表面				13.3	1	石英、小縫 海綿骨針	ヘラ記号、自然施
66	2003	B6	I・II層	森	I・c	口縁部	e1	ロクロ	ロクロ	表面				14.2	1	石英、小縫 海綿骨針	自然施
67	2003	B3～7	灰層1.2層 V層	森	I・b	体部上半～底部		ロクロ～ケズリ ロクロ～ナヂ	裏花文 ^d ナヂ	表面		18.2		7.4	1	石英、小縫 海綿骨針	ヘラ記号、回転ヘラケズリ
68	2003	B7	灰層1層	森	I	体部下半～底部		ロクロ～ケズリ ロクロ～ナヂ	裏花文 ^d ナヂ	表面			10	1	石英、小縫 海綿骨針	自然施、回転ヘラケズリ	
69	2003	B7・B8	灰層2層	森	I	体部下半～底部		ロクロ～ケズリ ロクロ～ナヂ	裏花文 ^d ナヂ	表面			11.3	1	石英、小縫 海綿骨針	田輪ヘラケズリ	
70	2003	B1	灰層1.2層 V層	森	I・b	口縁～体部上半	a1	ロクロ	ロクロ～ナヂ	裏花文 ^d ナヂ	表面		13.2	21.0	1	石英、小縫 海綿骨針	
71	2003	C3	灰層1層 I層	森	I	口縁～体部下半	a1	ロクロ	ロクロ～ケズリ ロクロ	表面			13.8	21.9	1	石英、小縫 海綿骨針	
72	2003	B6・C d5・e6	I・II層	森	I	口縁～体部下半	a2	ロクロ	ロクロ～ケズリ ロクロ	表面			15.2	26.4	1	小縫 海綿骨針	自然施
73	2003	D d5・e6	灰層2層 不明	森	I・b	口縁～体部上半	e2	ロクロ	ロクロ～ケズリ ロクロ	表面			14.6		1	小縫 海綿骨針	
74	2003	A1・C3	灰層1.2層 不明	森	I・b	口縁～体部下半	e2	ロクロ	ロクロ～ケズリ ロクロ	表面			13.8	17.4	3	石英、小縫 海綿骨針	
75	2004	c3・d	I・II層・灰層	森	I	口縁～体部上半	c1	ロクロ	ロクロ	表面				15.6	1	石英、小縫 海綿骨針	
76	2003	B3.5 c5(裏内) c5(裏外)	灰層1.2層 土1層	森	I	口縁～体部上半	b1	ロクロ	タクキヨロ ロクロ	表面				15.0	3	石英、小縫 海綿骨針	
77	2004	A	I層	森	I	口縁～体部上半	a1	ロクロ	タクキヨロ ロクロ	表面				20.5	3	石英、小縫 海綿骨針	壁1の可能性あり。口縫内側 大縫隙
78	2003	西壁	日層	森	I	口縁～体部上半	b1	ロクロ	ロクロ	表面				17.0	1	石英、小縫 海綿骨針	自然施
79	2003	B7	灰層2層	森	I	口縁～体部上半	a1	ロクロ	ロクロ	表面				16.0	1	石英、小縫 海綿骨針	ヘラ記号
80	2003	B3.45.7	灰層1.2層	森	I	口縁～体部上半	a1	ロクロ	桔子タクキ ロクロ	表面				25.6	1	石英、小縫 海綿骨針	自然施
81	2003	A6 B3.5.7	灰層1層	森	I	口縁～体部上半	a1	ロクロ	桔子タクキ ロクロ	表面				25.2	1	石英、小縫 海綿骨針	自然施
82	2003	A2・B7 II・灰層	II・II層	森	I	口縁～体部上半	a2	ロクロ	桔子タクキ 円錐形当貝齒	表面				21.8	1	小縫 海綿骨針	ヘラ記号
83	2003	A2	灰層2層	森	I	口縁～体部上半	a2	ロクロ	桔子タクキ ロクロ	表面				21.4	1	小縫 海綿骨針	
84	2004	d1	I層	森	I	口縁部		ロクロ	桔子タクキ ロクロ	表面				19.0	1	小縫 海綿骨針	ヘラ記号
85	2003	B5・B7	灰層1.2層	森	I	口縁～体部上半	c1	ロクロ	平行タクキ ロクロ	表面				18.0	1	石英、小縫 海綿骨針	ヘラ記号
86	2003	A1・B2・C II・II層	I・II層	森	I	口縁～体部上半	c1	ロクロ	平行タクキ ロクロ	表面				22.8	2	石英、小縫 海綿骨針	
87	2004	e4・f4	II層	森	I	口縁～体部上半	c1	ロクロ	平行タクキ ロクロ	表面				19.5	1	石英、小縫 海綿骨針	
88	2004	b10・b10 II・IV・VI層	II・IV・VI層	森	I	口縁～体部上半	e2	ロクロ	桔子タクキ 円錐形当貝齒	表面				27.6	1	石英、小縫 海綿骨針	
89	2003	B2.7・C2	灰層1層	森	I	口縁～体部上半	b1	ロクロ	桔子タクキ ロクロ	表面				56.2	1	石英、小縫 海綿骨針	
90	2003	B	I層	森	I	口縁部	a1	ロクロ	ロクロ	表面				54.0	1	石英、小縫 海綿骨針	
91	2003	C2	灰層2層	上傾	I	口縁～体部上半	a	ロクロ	ロクロ	表面				26.2	1	小縫 海綿骨針	自然施
92	2003	西壁	日層	上傾	I	口縁～体部上半	b	ロクロ	ロクロ～ケズリ ロクロ	表面				24.5	1	石英、小縫 海綿骨針	
93	2003	C3	灰層2層	上傾	I	口縁～体部上半	c	ロクロ	ロクロ	表面				17.2	1	石英、小縫 海綿骨針	
94	2003	B2	灰層2層	上傾	I	口縁～体部上半	e	ロクロ	ロクロ	表面				18.2	1	石英、小縫 海綿骨針	
95	2004	c4・d4・e4	IV・V・VI層	上傾	I	口縁～体部上半	c	ロクロ	ロクロ	表面				21.0	1	石英、小縫 海綿骨針	ヘラ記号、自然施

※表中の略号について

1.「型類」は第5章中の各器種の類型に対応する。

2.「端面形」は第5章中の各器種の端面形に対応する。

3.「測量」は上段が外側測量、下段が内側測量に対応する。

4.「焼成」は1が選元硬質、2が選元軟質、3が加熱化軟質、4が酸化化軟質に対応する。

第6章 KY1号窯跡灰原出土炭化材の年代測定と樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

広野遺跡では、平安時代(9世紀末頃)と考えられる須恵器窯(KY1号窯跡)が検出されている。窯は新旧2基あるが、新しい窯に由来すると考えられる灰原1層から燃料材の一部と考えられる炭化材が出土している。

本報告では、新しい窯から出土した炭化材について、窯の構築・使用年代に関する資料を得るために放射性炭素年代測定を実施する。また、燃料材の木材利用に関する資料を得るために樹種同定を実施する。なお、炭化材が小片であることから、年代測定は少量でも測定可能な加速器質量分析法(AMS法)で行う。

1. 試料

試料は、新しい窯(KY1号窯跡)から出土した炭化材で、c6グリッドから採取された2点、e6グリッドから採取された1点、b6から採取された1点、合計4点である。放射性炭素年代測定は、c6グリッド灰原1層の1点について実施する。樹種同定は4点全点について実施する。なお、試料名などの詳細は、結果とともに表示する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、加速器質量分析法(AMS法)により行った。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4(Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させていく。

(2) 樹種同定

木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

年代測定結果および樹種同定結果を表2に示す。放射性炭素年代測定値は、補正年代で1220BPであり、暦年較正値はcal AD 734-735,774-881であった(表3)。一方、炭化材の樹種は、全点落葉広葉樹のブナ属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

表2 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構	グリッド	試料名	質	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
KY1号窯	c6	灰原1層	炭化材	ブナ属	1220 ± 40	-23.29 ± 0.94	1190 ± 30	IAAA-41525
	c6	灰原1層	炭化材	ブナ属	-	-	-	-
	e6	表七B層	炭化材	ブナ属	-	-	-	-
	b6	灰原1層	炭化材	ブナ属	-	-	-	-

1) 年代前の算出は、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代前の算出は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定値 δ (測定値の68%が入る範囲) を年代前に換算した値。

表3 暦年較正結果

遺構	グリッド	資料名	補正年代(BP)	暦年較正年代(cal)		相対比	Code No.
				cal AD 734 - cal AD 735	cal BP 1215 - 1216		
KY1号窯	c6	灰原1層	1218 ± 37	cal AD 734 - cal AD 735	cal BP 1215 - 1216	0.015	IAAA-41525
				cal AD 774 - cal AD 881	cal BP 1069 - 1178	0.985	

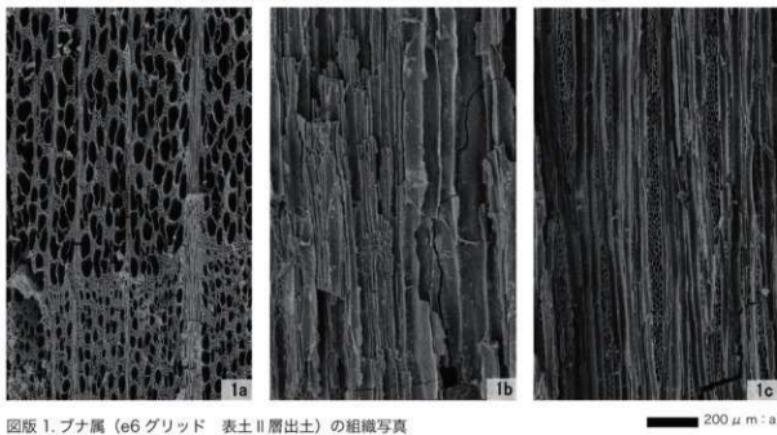
1) 計算是RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M. Stuiver and P.J. Reimer) を使用。

2) 計算是に表示した丸める前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定値 δ (測定値の68%が入る範囲) を年代前に換算した値。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性、單列、數細胞高のものから複合放射組織まである（図版1）。



図版1. ブナ属 (e6 グリッド 表土 II 層出土) の組織写真

1a:木口, 1b:歎目, 1c:板目

200 μm:a
200 μm:b,c

4. 考察

(1) 年代測定

須恵器窯跡は、発掘調査所見から9世紀末頃の可能性が考えられている。年代測定の結果は、補正年代で1220BP、曆年較正値でcal AD 734-735,774-881となる（図30）。この曆年較正値でみれば、8世紀前半、ないしは8世紀後半～9世紀後半となる。したがって、本窯跡は、8-9世紀頃に機能していた可能性があり、発掘調査所見とも矛盾しない。

(2) 木材利用

炭化材は、須恵器焼成時の燃料材と考えられる。樹種は全てブナ属であり、燃料材としてブナ

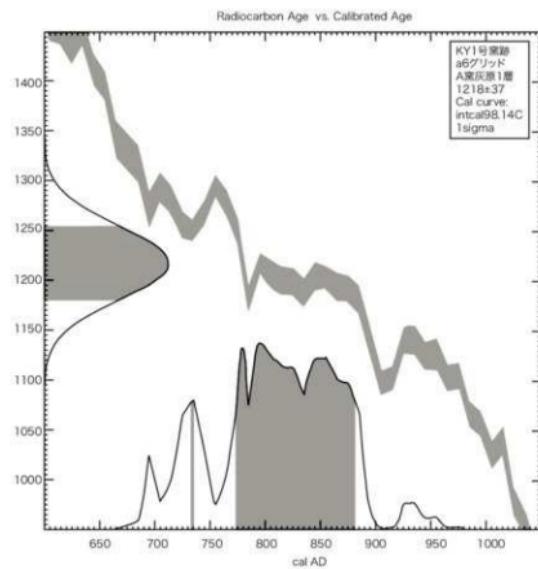


図30 KY1号窯跡a6グリッドA窯灰原1層の曆年較正曲線

属の木材が利用されていたことが推定される。この結果は、以前調査を実施した隱川遺跡の須恵器窯から出土した炭化材の樹種同定結果とも調和的である。

ブナ属にはブナとイヌブナの2種類があるが、組織・材質的には大きな違いが無いとされる。本地域では、岩木山北麓や東部の津軽山地にブナ林が分布している。このことを考慮すれば、今回の炭化材はブナの可能性が高い。ブナの木材は、気乾比重が0.50-0.75で幅があるが、比較的重硬で強度が高い部類に入り、漆器本地、下駄齒、杓子、工具の柄、薪炭材などに利用される(平井, 1979)。

須恵器は、一般には還元炎を用いて摂氏1100°C以上で焼成されることから(玉口・小金井, 1984)、使用する燃料材は重硬で火持ちの良い種類が適材と考えられ、そうした条件を満たす木材としてブナ属を利用した可能性がある。

本地域における9世紀前後の古植生については、調査事例が少ないが、持子沢窯跡支群のMZ 6号窯ではブナ属が多く見られ、古代の住居構築材等でもヒノキ科、ブナ属、クリ、モクレン属が認められている。これらの種類は、基本的にブナ林内に生育する種類が多く、周辺地域にブナ林が存在した可能性を示唆する。入手が容易なこともブナ属が燃料材等に多く利用された背景の一つとして考えられる。今後、花粉分析等の微化石分析も実施し、燃料材利用の背景となる周辺の古植生を調査した上で、今回の成果と併せて当時の植物利用について検討していきたい。

引用文献

- 平井 信二, 1979, 木の事典 第2巻, かなえ書房。
玉口 時雄・小金井 翔, 1984, 土師器・須恵器の知識, 東京美術, 163p.

第7章 まとめ

今回平成15年度と16年度の2カ年でKY1号窯跡の調査を行ったが、以下調査のまとめとして、項目別に述べていく。

1) 窯跡

標高35m前後の前田野目台地の低位段丘面に位置し、この立地状況は原子窯跡支群と同じである。しかし、現況はリンゴ畠によりほぼ平坦面であり、且つ窯体内に植樹されていたことから、窯体焼成部はすべて床面がなく、攪乱を受けていた。幸いにも燃焼部は残存しており、燃焼部の堆積状況から当窯は1回の床面の貼り替えが確認され、最低でも2回の焼成が確認された。残存している窯壁を見ると、窯構築時の支柱の痕跡が認められ、築造時の細い枝状の支柱で補強していたことが判明した。

灰原部は窯の下方にある旧河川跡を埋め立てるように堆積しており、2回の廃棄状況が確認できた。また、窯築造以前ないしは窯築造時と考えられる土壌3基及び溝跡2条が確認された。

使用された燃料材は分析の結果からブナ材と判明した。これは、MZ6号窯跡におけるブナ材（五所川原市教育委員会 2001）、HK3号窯跡におけるブナ材やクリ材（五所川原市教育委員会 2003）の使用と何ら変化は無く、木材の選定として、周辺に自生する木材の内で重厚で火持の良いブナ材を利用していたものと考えられる。

2) 年代

炭化材のC¹⁴年代測定の結果は、補正年代で1220BP、曆年較正値でcal AD734-735,774-881となる。この曆年較正値でみれば、8世紀前半、ないし8世紀後半～9世紀後半となり、後者の9世紀後半の結果は従来の考えと一致することになった。のことから、窯跡の操業開始時期は9世紀第4四半期相当ではないかと考えられる。

3) 出土遺物

出土遺物では壺が総出土量の半数を占め、食膳具と貯蔵具の比率が1:0.6となり、持子沢窯跡支群よりも食膳具の占める割合が高いことが判明した。このことは昨年度の報告で述べた調査結果である食膳具中心から貯蔵具中心へと生産体制が変化する。

各器種別の特徴として、①壺では体部下半に手持ちヘラケズリを施す個体があり、②蓋が出土している点、③壺1類の広口化が進行していないこと、体部下半に回転ヘラケズリを施す個体があること、④各器種ごとに口縁部端面形にバリエーションがあり、画一化していないこと、⑤ヘラ記号があまり記されないこと、⑥同一器種における胎土が均一では無く、小礫を多く含む（土師器の胎土に近い）個体が多いこと、⑦土師器を須恵器窯で焼成していることなどが挙げられる。

従って五所川原須恵器窯跡は初期段階において須恵器生産がまだ確立しておらず、次期の窯跡数が非常に多くなる持子沢窯跡支群の準備段階の様相を呈していると考えられる。そのことは消費地出土の須恵器において、KY1号窯跡のものに該当する個体が殆どないことからも窺える。ただし、各個体の製作状況や焼成状況を見ると非常に良好であることから、ロクロの使用技術、窯の築造技術及び焼成技術は初期の段階から確立しているものと考えられる。

須恵器窯で土師器を焼成していたという点から、操業時には土師器工人と須恵器工人の密接な関係、即ち従来土師器工人であった人が操業時段階で須恵器生産の枠組みに取り込まれ、須恵器工人化していくものと考えられる。

今後は、前期II期（MD7号窯跡）と後期（MD16号窯跡）における急激な生産体制の変化が緩やかに起こったものか、または一気に変化したのかを検討するために、両者の窯の間に位置する窯跡の調査を実施する予定である。

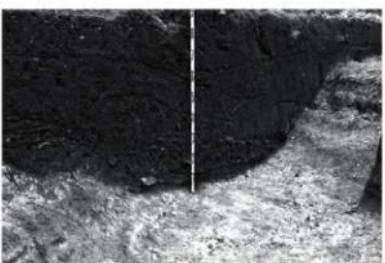
<引用・参考文献>

- 青森県教育委員会 1978『源常平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集
山口 義伸 1993『平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について』年報市史ひろさき No.2 弘前市
青森県教育委員会 1994『山元（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第159集
青森県教育委員会 1995a『山元（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
青森県教育委員会 1995b『野尻（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第172集
青森県教育委員会 1996『野尻（2）遺跡II・野尻（3）遺跡・野尻（4）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
半沢 紀 1997「第3節 犬走須恵器窯跡周辺の遺跡」『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』pp.18-25
青森県教育委員会 1997『実吉遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第207集
五所川原市教育委員会 1997『原子溜池（4）遺跡・原子溜池（5）遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第20集
青森県教育委員会 1998a『野尻（1）遺跡I』青森県埋蔵文化財調査報告書第234集
青森県教育委員会 1998b『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
青森県教育委員会 1998c『隱川（4）・（12）遺跡I』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
青森県教育委員会 2000『野尻（1）遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
五所川原市教育委員会 2000『隱川（2）外遺跡発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第22集
五所川原市教育委員会 2001『MZ 6号窯』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第23集
五所川原市教育委員会 2003『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
浪岡町教育委員会 2004『野尻（4）遺跡』浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第10集
中澤 寛将 2004「本州最北における須恵器窯の様相—五所川原産須恵器に記されたヘラ書きからの一考察—」
『白門考古論叢 稲生典太郎先生追悼考古学論集』pp.211-230

写 真 図 版



1. 調査区遠景



5. 旧河川跡セクション



2. 調査区近景



6. 溝跡完掘状況



3. 灰原遺物出土状況（1）



7. 試掘トレンチ完掘状況



4. 灰原遺物出土状況（2）



1. 窯体確認面



5. 燃焼部床下セクション



2. 窯壁出土状況



6. 土壤完掘状況



3. 燃焼部セクション



7. 完掘状況

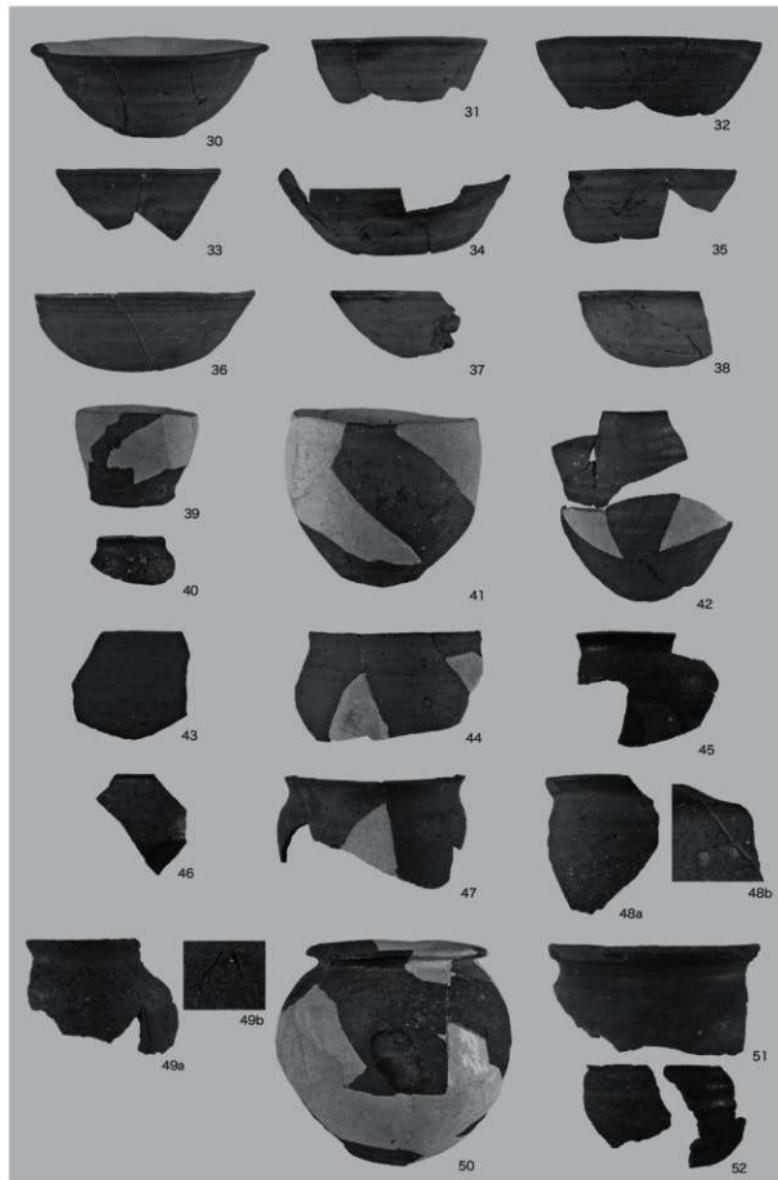


4. 燃焼部完掘状況

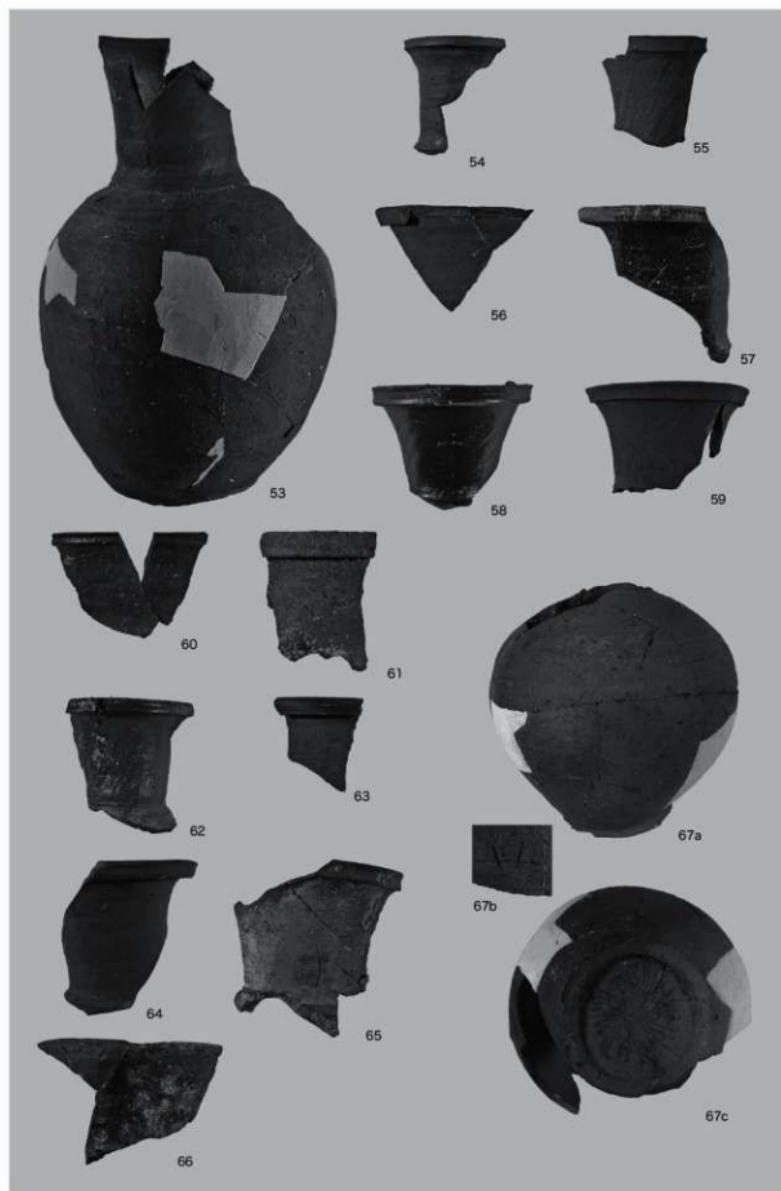




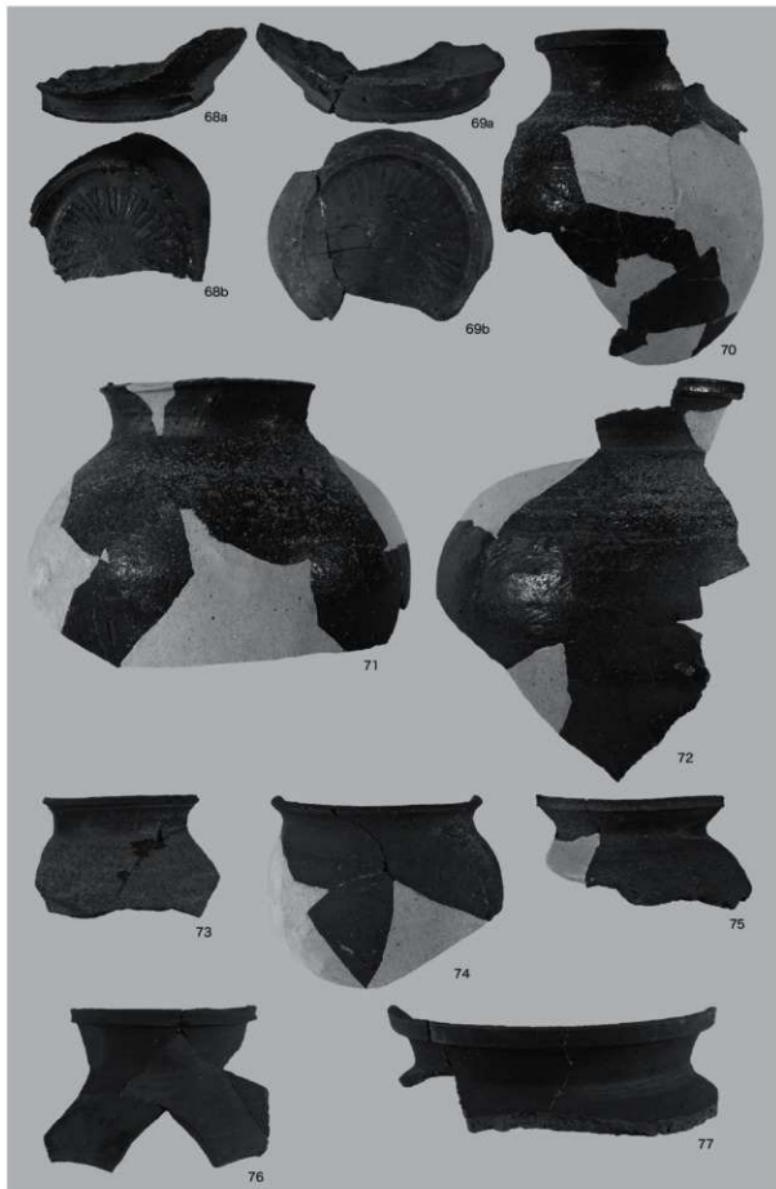
写真図版3 KY1号窯跡出土須恵器(1)



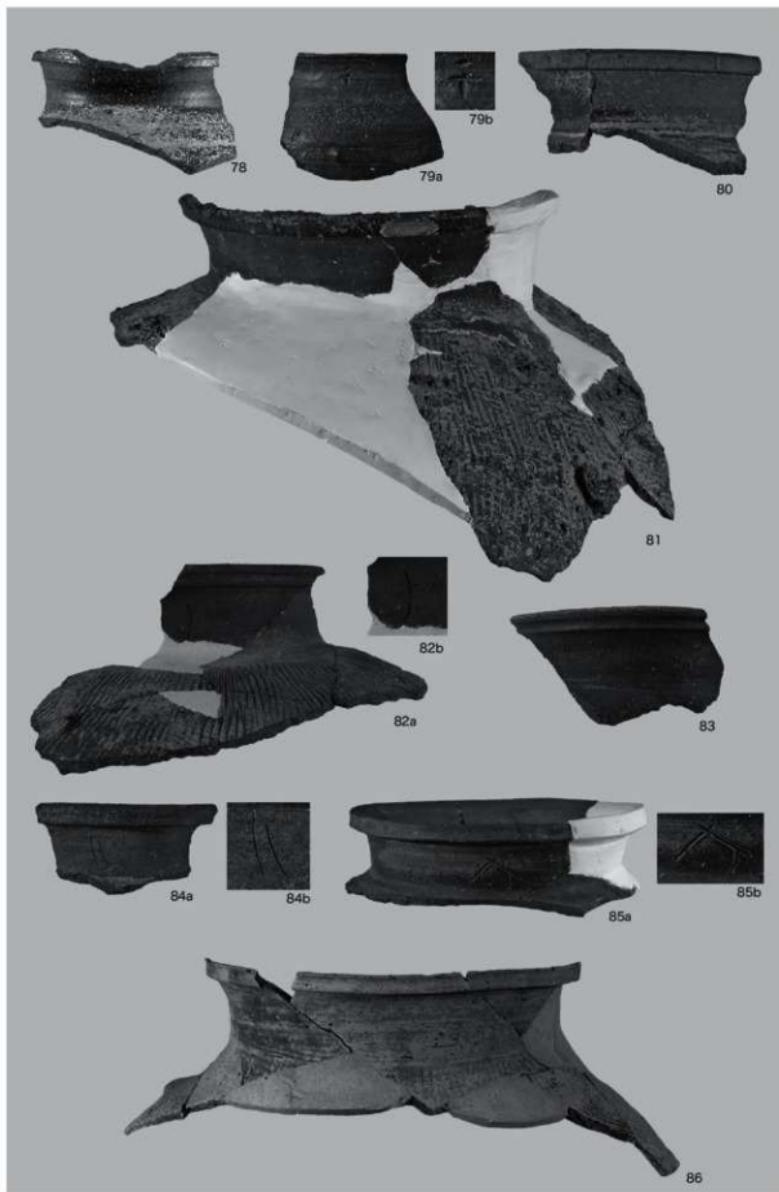
写真図版 4 KY1 号窯跡出土須恵器 (2)



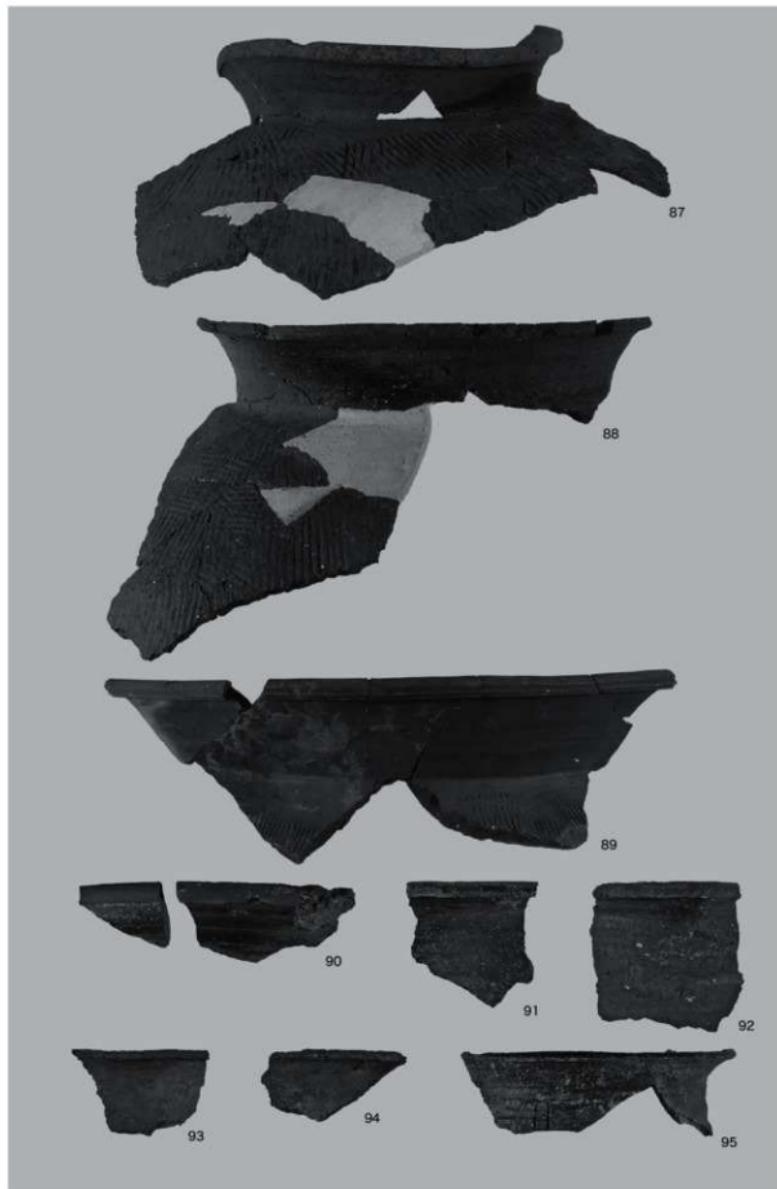
写真図版 5 KY1号窯跡出土須恵器 (3)



写真図版 6 KY1 号窯跡出土須恵器 (4)



写真図版 7 KY1号窯跡出土須恵器(5)



写真図版 8 KY1 号窯跡出土須惠器 (6)

報告書抄録

ふりがな	けーわいいちごうかまあと							
書名	KY1号窯跡							
図書名	『五所川原須恵器窯跡』における初現期窯跡の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	五所川原市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	26							
編著者名	藤原弘明							
編集機関	五所川原市教育委員会							
所在地	〒 037-8686 五所川原市字岩木町 12 番地 TEL 0173-35-2111							
発行年月日	西暦 2005 年 2 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
広野遺跡 (KY1号窯跡)	五所川原市大字高野字広野 93-1,96-1ほか	05	101	40 度 44 分 31 秒	140 度 32 分 31 秒	1次調査 平成 14 年 5 月 1 日 ～ 平成 15 年 5 月 21 日 2次調査 平成 16 年 5 月 10 日 ～ 平成 16 年 6 月 9 日	60 平方メートル	学術調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
広野遺跡 (KY1号窯跡)	窯跡	開文時代 平安時代	窯跡 1 基 土壤 3 基 溝跡 2 条	陶文土器 土師器 須恵器 窯壁片	・窯は燃焼部を除き搅乱を受けていた。 ・燃焼部の床面は 2 枚確認された。 ・炭素 14 年代測定法により 9 世紀第 4 四半期であると考えられる。 ・出土遺物や年代測定から五所川原須恵器窯跡の中でも初期の窯跡であると考えられる。			

五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第 26 集							
KY1号窯跡							
—『五所川原須恵器窯跡』における初現期窯跡の発掘調査報告書 —							
発行日	2005 年 2 月 21 日						
発 行	五所川原市教育委員会						
		〒 037-8686 青森県五所川原市字岩木町 12					
		TEL 0173-35-2111					
印 刷	有限会社 西北印刷						
		〒 037-0014 青森県五所川原市大字福実字米崎 49-3					
		TEL 0173-35-1303					